

Contrastive Expressions in Mark Twain's  
*The Prince and the Pauper*

姜 爽  
(JIANG SHUANG)

比較文化

HIKAKU BUNKA  
Comparative Cultural Studies  
The Graduate School of Humanities,  
Fukuoka Jo Gakuin University

「福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要」第二一号抜刷

2024（令和6）年3月

ISSN 2759-1654

# Contrastive Expressions in Mark Twain's *The Prince and the Pauper* GC21M002 姜 爽(JIANG SHUANG)\*<sup>1</sup>

## Introduction

本修士論文では、英語文体論の観点より、米国作家マーク・トウェイン(Mark Twain 1835-1910)①の *The Prince and the Pauper* (1881)の言語分析を展開し、文体的な特徴と小説のテーマとの繋がりを考える。stylistics の最大の関心の一つは、作品のテーマにかかわる表現と内容の関係である。したがって、本作品への文体論的アプローチは、この作品の文体と内容との関係、つまり、文体と本小説のテーマとの関係を探るためのものであるが、最終的には、作家、アメリカ・イギリスの社会的背景、経済的情勢というマクロ的研究も視野に入れることとしたい。また、文体論的研究は、言語に豊富な複雑さを表す際の価値の発見であるので、本論文で展開する文体論研究も、本作品に関する文芸批評上、教育上、文学的応用上などさまざまな分野で実りあるものと思われる。マーク・トウェインは米国文学において最も人気のある作家の一人であり “the father of American literature” と呼ばれることもある。彼の作品には独自のテクニクやレトリックがしばしば見られ、それらはリアリスティックな表現の追求の表れとも考えられている。② このようなマーク・トウェインの作品を例として文体分析をすることは、アメリカ文学史の点から見ても、小説の文体的価値の再確認及び発掘、リアリズムの意義の再確認及びさらなる理解の助けにもなると言えるのではないだろうか。

本論における文体論的アプローチでは、具体的な例を挙げながら、text、paragraph、sentence、word という4つのレベルにおける、特に、“contrastive expression”、また、“unusual collocation(oxymoron)” に注目する。その際、マーク・トウェインの経歴や本作品の創作背景も考慮に入れ、彼のリアリズムについての理解を深め、*The Prince and the Pauper* の主題と現時代との繋がりが及び作品の意義について触れてみる。

第1章では、作家としてのマーク・トウェインの作品とアメリカ社会との関係を見ながら、彼の文学にアメリカ社会のどのような点が映じられているのかを概観し、マーク・トウェインという人物の理解を試みる。このマーク・トウェインを理解するという作業は、

\*<sup>1</sup> 指導教授 上田修教授 福岡女学院大学大学院 人文科学研究科 比較文化専攻

*The Prince and the Pauper* の内容理解を深めるためには避けられないものであろう。というのも、本論文の目的の一つに、典型的なマーク・トウェインらしい作品とは言えない本作品を彼が創作した際の時代背景と彼自身の考えの変化などに注目し、この作品を創作した理由と目的を探ってみたいというものがあるからである。このような点について考えるため、それぞれにセクションにおいて、1.1 作家、1.2 作品 (1.2.1 あらすじ / 1.2.2 特徴:1.2.2.1 背景、1.2.2.2 細かな服装や環境描写、1.2.2.3 古い英語の使用) を概観する。その際、この第1章と次の第2章の内容は、相互に補い合うことを念頭に置いておきたい。

第2章においては、文体的なアプローチ、特に、コントラスト的な視点からの文体分析を試みる。ここでは、コンテキストのレベルを、paragraph / sentence / word のレベルから、5つの section、すなわち、2.1. text 内のコントラスト、2.2.paragraph 内のコントラスト (2.2.1 word level contrast、2.2.2 parallelism)、2.3.sentence 内のコントラスト (2.3.1 複数の sentence 内のコントラスト:2.3.1.1 word level contrast、2.3.1.2 parallelism、2.3.2 1 つの sentence内のコントラスト:2.3.2.1 word level contrast、2.3.2.2 parallelism)、2.4 unusual collocation(oxymoron)、2.5 others に分け、具体的に例を挙げながら文体分析をし、その文体と内容の関係を、主題のパースペクティブより検証する。

## 1章 作家 作品

この章では、マーク・トウェインの創作経歴及び彼がアメリカ文学史で重要な地位を確立している点を確認する。また、*The Prince and the Pauper* のあらすじ及び特徴を概観する。

### 1.1 作家

マーク・トウェインの文学は、アメリカ社会の変化と資本主義に対する彼の考えの変化に呼応しており、一般的に以下のような三つの創作経歴に分けられる。

第一段階

時代

19世紀60年代

代表作

“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”(1865)/*The Innocents Abroad*(1869)

作品の特徴

肯定的 軽快なユーモア

アメリカ社会

資本主義革命は急速に発展した。国民総生産は著しく増加した。移民のクライマックスで、人種間衝突が始まった。

1869年、オマハとサクラメントを結ぶ最初の大陸横断鉄道が開通し、ヨーロッパからさらに多数の移民をひきつけた。

第二段階

時代

19世紀70-80年代

代表作

*The Gilded Age: A Tale of Today*(1873) / *The Adventures of Tom Sawyer*(1876) / *The Prince and the Pauper*(1881) / *The Adventures of Huckleberry Finn*(1885)

作品の特徴

中立的(冷徹な目) 辛辣なユーモア

アメリカ社会

金ぴか時代③。

1877年に全国大会鉄道労働者ストライキ事件が起きた。

(The Great Uprising) 国際影響力は強くなった。

第三段階

時代

19世紀90年代以降

代表作

*Following the Equator*(1897) / *The Man that Corrupted Hadleyburg*(1899) / *What is Man?*(1906) / *The Mysterious Stranger*(1916)

作品の特徴

否定的 悲観と絶望 アイロニー

アメリカ社会

急成長をとげたアメリカ資本主義は、1880年代に独占資本の形成が進み、工業生産は1894年には世界一となるまでに発展した。その裏では、各種の企業合同、特にトラストが成立し、大資本家が政府と結び、汚職や政治への介入が続くなど

独占資本の弊害があらわになってきた。

帝国主義時代に入った。植民地政策をとった。

1898年4月、米西戦争（Spanish-American War：アメリカ合衆国とスペイン帝国の間）。④4

1899年、門戸開放政策（Open Door Policy）④5

第一段階のマーク・トウェインは、まだ資本主義に期待を寄せていた。彼は初期の作品で、資本主義社会の機に乗じ、狡猾な手段で利益を得ることを批判してはいるが、そういった批判も軽い風刺にとどまっている。この段階に見られるユーモアは、マーク・トウェインの文体を貫く重要な特徴であるが、そのユーモアは、彼の晩年になるほど、風刺の要素へと変化してゆく。

第二段階では、アメリカ社会を深く認識したマーク・トウェインは、そのネガティブな現実（投機行為、汚職、人種差別、迷信の宗教化、形骸化した教育制度など）を様々な方面から批判した。彼の代表作である *The Adventures of Tom Sawyer* および *The Adventures of Huckleberry Finn* は、この時代に書かれている。両作品は、主人公の冒険を通して、アメリカの偽善的な社会慣習、偽善的な宗教儀式、型にはまった学校教育などを風刺、批判し、特に後者においては、人種差別に関する問題提起がなされており、彼の、ひいてはアメリカ文学の最高傑作となっている。本論文で取り扱う *The Prince and the Pauper* は、まさにこの時期に創作された作品である。

第三段階に見られる彼の文学には、アメリカの帝国主義が大きく影響していると言えるだろう。この時期、アメリカは世界各地で植民地政策を進めていた。また、同時に、アメリカ社会内部の矛盾も悪化し、貧富の格差が大きくなっている。アメリカに対する信頼マーク・トウェインは失い、ネガティブになっていったのである。

マーク・トウェインが、“the father of American literature”と呼ばれるのは、このように、彼の作品がアメリカ社会の変化と呼応していることにも起因するが、さらに、次のような理由も考えられるだろう。

- ① マーク・トウェインは、世界にアメリカ文学に関する新しい認識を与えた。
- ② マーク・トウェインは、弱者に関心を持ち、社会の暗黒面を批判する勇気を持ち、政治と宗教の権威に挑戦した。

19世紀末のアメリカの作家にとって、マーク・トウェインのリアリズムは、慣習的な

表現からの開放という意味を持つばかりでなく、社会真理を表現し、陳腐な習慣を破るための方法でもあった。こういったことが、マーク・トウェインがアメリカ文学史で重要な地位を確立している理由であろう。文学には、優美な言葉というような表現上の魅力だけでなく、人々に文字の裏に表わされた現実気づかせるという意義もある。文学史上千年に渡って伝えられている優れた文学作品が存在するのも、このような理由からだろう。マーク・トウェインの作品上のリアリズムの検証が、作品を通して彼が訴えたかった社会の現実の理解に結びつくと思える理由はここにある。

## 1.2 作品

*The Prince and the Pauper* は、マーク・トウェインが初めて書いた historical fiction である。この小説は、しばしば realistic fiction 又は児童文学作品に分類される。*The Prince and the Pauper* は、まず1881年にカナダで発表された。そして、1882年にアメリカで James R. Osgood and Company という出版社から出版された。<sup>⑥</sup>

マーク・トウェインは、自分の経歴を基に作品を書くことが多く、マーク・トウェインと言うと、まずは *The Adventures of Tom Sawyer* などアメリカ南部の特徴が色濃い作品が思いされるだろう。しかし、*The Prince and the Pauper* は、アメリカニズムに満ちたマーク・トウェインの典型的な作品ではない。この作品は、彼が、2回目のヨーロッパツアーを通じて、イギリスとフランスの歴史について見知を広げた後で書いた作品であり、その内容は史実を基にした16世紀のイングランドが舞台となっている。つまり、この小説に描写されている風景、街の様子、人々の生活、考え方などは、マーク・トウェイン自身の実生活のそれらとは、大きく異なったものである。とは言え、*The Prince and the Pauper* には創作時期だけでなく、主題的にもトム・ソーヤーやハックルベリー・フィンに類似する点が見られる。トム・ソーヤーが完成してからわずか2年後の1877年に *The Prince and the Pauper* は文学的な形になり始め、その一部はハックルベリー・フィンと同時期に書かれたのである。さらに、これら三つの小説はすべて“the turning point for child-heroes”に関するものである。重要な相違点は、*The Prince and the Pauper* では、英国の16世紀の歴史を利用して、19世紀のアメリカ社会に対するマーク・トウェインの考えが述べられている点である。

### 1.2.1 あらすじ

*The Prince and the Pauper* は、16世紀のイングランドを背景に、貧民窟に生まれたトム・キャンティ(Tom Canty)と時の国王ヘンリー8世(Henry VIII: 1491-1547)の嗣子

として生まれたエドワード6世(Edward VI: 1537-1553)、これら二人のこどもの物語である。

トムは、ロンドンの“Offal Court”という汚くて貧しい所に家族と住んでいる。トムの父親は、泥棒である。毎日仕事もせず、ぶらぶら遊び、しょっちゅう大酒を飲んでいる。トムは幼い頃から凄惨をきわめる生活を強いられ、毎日物乞いをさせられる始末である。その上父親と祖母の虐待に耐えなければならない。そんなトムの心を慰める人がいる。一人は、トムの母親である。彼女は、真心からトムを愛し、自分が飢えても食べ物をつまみに与える。もう一人は、アンドリュー神父(Father Andrew)である。彼は、トムに知識を与え、正しい行いを教える。トムは、彼から国王や王子の多くの物語を聞き、しばしば自分が王子だと想像することで現実の苦しみを忘れる。

一方、王子エドワードは、幼い頃から贅沢極まる生活をするが、宮廷外の生活や自由に憧れている。劇的に同じ顔のトムと王子エドワードは、偶然に出会い、遊びで衣服を変える。そのことにより、二人の身分が変わってしまう。

偽の王子となったトムは、最初心が騒ぎ、自分が偽の王子であることが暴かれたら処刑されるのを恐れている。しかし、皮肉なことに、誰もこの明らかな“秘密”には気付かない。エドワードの父親であるヘンリー8世でさえも、王子の奇行の原因は病気であると思っっている。日が過つにつれて、トムは、だんだん宮廷の生活に慣れ、不安も減っていく。そして、国王ヘンリー8世が死んだ後で、トムは王となる。彼は、物欲と権力に浸って、自分の母親を認めないようなことをしたこともあるが、悪人にはならず、善良な心から、いくつかの残酷な刑罰を廃止し、罪のない人を赦免し、多くの公平な法令を發布し、民衆に愛される。最後は、トムが、エドワードに協力してエドワードの身分を証明する。

一方、平民となった王子エドワードは、英国の残酷な統治がもたらす底層階級の生活の苦しさを直接目撃する。彼は、自分が王子であることを堅持するので、周りからは狂っていると思われる。彼は、みすばらしい衣服を着て、腹を空かせ、流浪して、何度も危険にさらされる。さらに、彼は、気が狂った隠修士に殺されかけるが、マイルズ・ヘンドン(Miles Hendon)の助けにより、無事にロンドンに帰り、戴冠式で自分の身分を証明し国王になる。トムとマイルズ・ヘンドンは、富とタイトルを与えられ、悪人たちは罰を受ける。

### 1.2.2 特徴

次は、*The Prince and the Pauper* の特徴を、①背景②細かな服装や環境描写③古い英語の使用の点から外観しておく。

### 1.2.2.1 背景

Mark Twain Project によると、*The Prince and the Pauper* の創作インスピレーションは、マーク・トウェインが Quarry Farm にある義理の妹の図書館で見つけた“The thought came to me from the outside—suggested by that pleasant and picturesque little history-book, Charlotte M. Yonge’s “Little Duke.” . . .”から来ているとのことである。

最も初期の原稿の現存する草案では、彼がこの物語を19世紀に置こうとしたことがわかる。Victoria 女王（1819年-1901年）の後継 Albert Edward、後の Edward VII（1841年-1910年）を主人公の王子としようとしていたようである。そして、ロンドンの産業革命を背景に Jim Hubbard というスラム街に住んでいるこどものキャラクターを作っていた。しかし、Albert Bigelow Paine によれば、マーク・トウェインは、Albert Edward の“proud estate denied and jeered at by a modern mob.”をもっともらしく描写することはできなと感じたらしい。従ってマーク・トウェインは、“followed back through history, looking along for the proper time and prince.”（歴史を振り返り、適切な時間と王子を探した）。そして、最終的に Edward VI (1537年-1553年)を見つけた。1876年から1881年の間に、マーク・トウェインは英国の歴史の調査だけでなく、当時の文学作品も読み、55ページ以上の単語やフレーズの長いリストを含む研究ノートを作成した。文学作品というものは、一挙に成し遂げられるものではない。*The Prince and the Pauper* も同様で、その原稿全体に多数の改訂があり、そのほとんどは言語とプロットを洗練し、キャラクターをより信頼できるものにするを目的として行われた。

Mark Twain Project のイントロダクションからいくつかの例を挙げておこう。

a. マーク・トウェインは、第1章でトムとエドワードの誕生日を削除している。10歳未満の子どもとしては、彼らは非常に賢いキャラクターであるので、読者に10歳未満であることを思い出させるような日付について言及することは慎重に避けたということである。

b. マーク・トウェインは、文学的必要性のために歴史的正確さを犠牲にしている。歴史上、エドワード6世は、体が弱く病気がちであった。明らかに、彼は厳しい冒険を生き残ることは不可能な子どもであったが、マーク・トウェインは、彼の描写において“pale”を“comely”に書き換え、“tanned and brown with sturdy out-door sports and exercises.”を付け加えている。

c. マーク・トウェインは、論理的な合理性を重視しプロットを追加している。三つの例は以下の通りである。



貧民窟出生のトムが、宮廷の生活に慣れる。	↔	Father Andrew は、トムに知識を与え、正しい行いを教える。
Seal が失くなって、エドワードとトムしか Seal の場所を知らない。	↔	“In a moment he had snatched up and put away an article of national importance that lay upon a table,” (第3章) (エドワードは、すぐにテーブルの上に置かれていた国家的に重要な物品をひったくり、片付けした。) + 第32章で、エドワードはトムの助けにより、Seal の場所で自分の身分を証明する。
同じ顔をしているが、トムの母親は、エドワードがトムではないことに気づいている。	↔	同じ顔をしているが、驚いた時に無意識の習慣が違う。これは、一番トムのことを愛している母親しか知らない。(第10章 + 第31章)

*The Prince and the Pauper* には、様々な批評がみられる。例えば、Edwin Pond Parker は“Mark Twain has finally fulfilled the earnest hope of many of his best friends, in writing a book which has other and higher merits than can possibly belong to the most artistic expression of mere humor.”と批評しているが、同時に讃美もみられる。Joseph T. Goodman は“You went entirely out of your sphere. The laboriousness is apparent everywhere by which you endeavor to harmonize irreconcilable improbabilities, to manage the obsolete customs and parlance of the times, and to wrestle generally with a condition of things to which you feel yourself alien and unsuited. And after all you don't succeed.”と言っている。<sup>⑦</sup>

### 1.2.2.2 細かな服装や環境描写

この作品では、服装や環境に関する細かな描写が多く見られる。例えば、本小説第9章の中にみられる服装や環境描写である。この場面では、服装や環境の描写に章全体の約70%の単語が使われている。その詳細は以下の通りである。

段落	内容	全語数 (服装・環境描写、その他)
1	The whole vast river-front of the palace.	121 (121, 0)
2	The halberdier, the troops and the people in the boats.	61 (47, 14)
3	The barges.	128 (128, 0)
4	The procession.	344 (194, 150)
5	The appearance of Duke of Somerset and Tom.	137 (53, 84)
6	The description of Tom.	109 (84, 25)

第9章では、全部で900語が使われているが、この内、627語(69.7%)は服装や環境の細かな描写に使われている。他の273語は、プロット展開、会話、心理描写などのために使われている。マーク・トウェインは、服装や環境を細かに描写しながら、読者を、たとえそれが19世紀のアメリカ人であろうとも、21世紀の日本人であろうとも、16世紀のロンドンに身を置かせるのである。これは、マーク・トウェインのリアリズムに関する文体の特徴に大きく関係するであろう。このような描写については、本論文の第2章のsection2.5で詳述する。

### 1.2.2.3 古い英語の使用

本作品では、16世紀英国の英語を模した表現が、特にキャラクター間の会話に頻出する。代表的なものを概観しておく。

次の例を見てみよう。

(トムが宮廷へ行き、初めて王子エドワードに会う場面である。)

The soldier said:

Mind thy manners thou young beggar!"

The crowd jeered and laughed; but the young prince sprang to the gate with his face flushed and his eyes flashing with indignation, and cried out:

How dar'st thou use a poor lad like that! How dar'st thou use the king my father's meanest subject so! Open the gates and let him in!"

(下線は筆者)

マーク・トウェインは、ここで"soldier"がエドワードを呼ぶ際に"your"の代わりに"thy"を、"you"の代わりに"thou"を、又、王子エドワードが"soldier"を呼ぶ際にも"you"の代

わりに“thou”を使わせている。さらに、現代英語では“How dare you treat a poor lad / How dare you treat the king”と言うべき所を、マーク・トウェインは、“How dar<sup>st</sup> thou use a poor lad / How dar<sup>st</sup> thou use the king”と言う古い英語の表現（二人称単数動詞の屈折-st）をエドワードに使わせている。このような例は、本小説におけるキャラクター間の会話において、一貫してみることができる。本作品の“you”と“thou”の使用に関しても、Shakespeare のそれとはかなり違うものであるという指摘もある。このような点も、非常に興味深いのが、本論では触れないこととする。とは言え、マーク・トウェインがキャラクターに語らせるこのような16世紀の英語は、19世紀のアメリカ人である彼にとっては、実体験のない空想上の英語である、ということは、読者としては覚えておかなければならないだろう。

## 2章 文体コントラスト

本章では、*The Prince and the Pauper* におけるマーク・トウェインの文体的特徴に注目して論を進める。その際、特に、表現に見られる様々なコントラストに注目する。本小説において対比されているのは単に、タイトルが示すような“prince”と“pauper”、すなわち、王子エドワードとトム我的生活環境、服、言葉、考え方などだけでなく、国王ヘンリー8世の統治時の宮廷（人）と一般社会・平民も対比の対象となっている。こういった点から眺めると、本小説における対比表現の研究では、作家の社会への風刺という点にまで広げて論じることができるだろう（風刺においては、unusual collocation の例が数多く見られるので、詳しく後述する）。

### 2.1 text 内のコントラスト

マーク・トウェインの *The Prince and the Pauper* は、コントラストティブな表現に溢れた作品である。コントラストティブな表現は、[+wealth] [+royalty] [+class] といった意義素を持つ“the Prince”（モナークではほぼ一番高貴な存在）と[-wealth] [-royalty] [-class]とといった意義素を持つ“the Pauper”（社会で底辺の生活をする人）が、“and”によってつなげられているわずかに5語による本のタイトルに始まり、各章のタイトル、またプロット展開にさえも表れている。

ここで少し小説全体のプロットという観点から、エドワードとトムを外観しておこう。*The Prince and the Pauper* は、全部で33章あり、その中で、エドワードとトムが登場する章は6章、エドワードのみが登場する章は17章、トムのみ登場する章は9章ある。また、エドワードとトム、二人とも登場しない章は第8章のみである。（この章ではヘンリー8

世のことだけが書かれている。) *The Prince and the Pauper* 全体にエドワードが登場する章は23章、トムが登場する章は15章あることから分かるように、マーク・トウェインは、トムよりどちらかと言えばエドワードの冒険生活にフォーカスを置いていると言える。

章のタイトルをつける際、マーク・トウェインは、主に phrase を使っている。例えば、第13章の“The Disappearance of the Prince”の如くである。ここで注目すべきは、タイトルでエドワードに言及する場合、第33章のタイトル“Edward as King”以外すべてエドワードのことを、例えば、第19章の“The Prince with the Peasants”のように、“prince”で表していることである。一方、トムについて言及しているタイトルは、例えば第5章の“Tom as a Patrician”のように、すべて“Tom”が使われている。マーク・トウェインが二人の階級の違いをコントラストティブに強調していることをわかるだろう。ここで見られるような人の呼び名(participant items)の例は、他の場面でも多く見つけることができる。

章のタイトルでほかにも注目できるところがある。例えば、第23章の“The Prince a prisoner”に注目してみよう。人の命と罪名を決めることができる“prince”[+free] [+right]、及び他者によって生死と罪名を決められる“prisoner”[-free] [-right]、この相反の意義素を持つ二つの単語が繋がって使われている。エドワードの無力と悲惨な現状を描いているのである。これは unusual collocation、特に oxymoron の例であると捉えることができるだろう。このような unusual collocation の例は、他の場面でも多く見つけることができる。

タイトル以外に、プロットの流れに見られるコントラストティブな表現を見てみよう。*The Prince and the Pauper* のナラティブ・スレッド(narrative thread)は、この小説のタイトルが示す通り二つあると捉えることが可能である。当然、一つはエドワードであり、もう一つはトムである。ここで、これら二つのナラティブ・スレッドの特徴を外観しておきたい。この小説では、エドワードとトムのナラティブ・スレッドは、例えば、第12章-13章はエドワード、第14章-16章はトムのように、章ごとに規則正しく交互に現れるとはいえない。しかも、これら二つのナラティブ・スレッドは、時折、「交差」する場合も見られる(エドワードとトムは、第3章(宮廷)第11章(ギルドホール)第32章(West-minster Abbey)第33章(宮廷)の四場面で、同じ場所に登場する)。<sup>⑧</sup>

エドワードのナラティブ・スレッドでは、エドワードが「王子」→「乞食」→「国王」になる物語が描かれている。エドワードはこの中で成長し、「のうのうと贅沢な暮らしをする王子」→「社会のどん底に押しえつけられている乞食」→「国民のために考える国王」へと成長してゆく。トムのナラティブ・スレッドでは、トムが「乞食」→「王子」→「国王」

→「King's Ward」になる物語が描かれている。トムもまた、彼のナラティブ・スレッドの中で成長し、「社会のどん底に押さえつけられている乞食」→「宮廷生活に慣れない滑稽な王子」→「権力に夢中にするが無罪の人を救う国王」→「幸せに生活できる King's Ward」になってゆく。このように、エドワードとトムは、それぞれのナラティブ・スレッドの中で成長し、最終的により良い人になって、幸せな結末を得る。

次は、キャラクターの設定上のコントラストを見てみよう。まず、*The Prince and the Pauper* で一番重要なキャラクター (leading role) であるエドワードとトムの設定上のコントラストを見てみよう。

	エドワード	トム
status	prince	pauper
wealth	rich	poor
class	the upper class	the common / low class
family	father: good to him and protect him	father & grandmother: mistreat him mother & sisters: good to him but can't protect him
life	be served & be reared in the lap of luxury	begs by himself & often goes hungry and sleeps on the floor
education	get a decent education	can't go to school, only learn simple things from father Andrew
other people's attitudes	love and esteem him	indifferent to him

エドワードは王子の身分で、多くの富を持ち、高い地位にいる。そして、贅沢な生活をして、よい教育を受けて、他人に尊重されている。エドワードの父親のヘンリー 8 世は他人にとって残酷な統治者であるが、エドワードにとっては、良い父親である。一方、トムは貧乏で、毎日食べ物とお金の問題に悩んでいる。学校に通えないし、他人からの扱いもひどい。そして、トムを愛している母親と姉妹がいると同時に彼を虐待する父親と祖母がいる。

本小説では、このようなエドワードとトムの設定上のコントラスト以外にも、注目に値する設定上のコントラストは数多い。例えば、エドワードをはじめとする貴族階級とトムをはじめとする庶民階級である。作者がこのような階級のコントラストを使って、貴族階

級を批判し、庶民階級の悲惨な現状を表す場合が多くみられる。また、ヘンドンをはじめとする善人とジョン・カンティをはじめとする悪人のコントラストも顕著である。とは言え、児童文学作品としてみなされる *The Prince and the Pauper* でありながら、この小説には、善人と悪人のコントラストを強めながらも、善人は善人のまま、また、悪人は悪人のままを貫くようなキャラクター設定ではないことにも触れておこう。いわゆる round character が登場するのである。例えば、トムは善人と言えるが、一度は享楽に耽り実の母を母と認めないことがある。また、エドワードも善人と言えるが、奢侈な生活を当たり前のように思うなどの貴族特有の悪い癖が抜けない。また、第18章で登場する浮浪者たちは善人とは言えないが、残酷な社会に迫害された末の生活を余儀なくされていると言う点からすれば、いわゆる封建社会の「被害者」とも言えるだろう。

*The Prince and the Pauper* は、確かに、良い人は良い結果を得（トムは“King's Ward”のタイトルをもらう。ヘンドンは“Earl of Kent”になって、お金と土地をもらう。）、悪い人は罰を受ける（トムの父は処刑される。Sir Hugh は逮捕される。）と言った児童文学にありがちな勧善懲悪に近い結末という点から見ると、本作は十分に児童文学作品の特徴を持っていると言えるだろう。しかし、本小説は、このような勧善懲悪といった単純な構成ばかりではなく、19世紀のアメリカの現状を批判するといった現実世界への批判を暗示している点、すなわち、文学的意味におけるリアリズムの一端もみることができるのである。

以上のように *The Prince and the Pauper* においては、コントラスト的な表現が多出する。以下、例を見ながら本小説におけるコントラスト的な表現の詳細を見てみよう。

## 2.2 paragraph 内のコントラスト

この section では、具体的にいくつかのパラグラフからコントラスト表現を抜き出して、パラグラフ内のコントラストを眺めてみよう。

まず、典型的な例（本小説第16章からの例）を見ておくことにする。ここでは、マーク・トウェインが、トムが宴会に参加する場面をコントラスト的に描くことで、貴族への風刺を強めている。

（トムが「国王」として出席している宴会で、帽子を脱がず、少しも恥ずかしがらずに座る場面）

He seated himself at table, **without removing his cap; and did it without the least embarrassment;** for to eat with one's cap on was the one solitary

royal custom upon which the kings and the Canty's met as upon common ground . . .

(太字は筆者)

帽子をかぶって食事をするという事は、国王にとっては当たり前の習慣であるが、同時にこれは貧民であるカンティー家で育ったトムにとっても当然の習慣である。コントラストの視点からこの情報を分析してみよう。

王室の習慣では、帽子をかぶって食事をすることは、国王の特権であり習慣、すなわち、“royal custom”[+right] [+status] [+formality]である。一方、トムはこういった習慣とは違う理由、すなわち、貧民街で育つ中で身につけている習慣によって、帽子をかぶって食事をする。“without removing his cap; and did it without the least embarrassment”[-right] [-status] [-formality]。という仕草にこれが見られる。

上記場面とコントラストタイプに描かれている貴族の描写はどうであろうか。

The pageant broke up and grouped itself picturesquely, and remained bareheaded. . . .

“The Yeomen of the Guard entered, bare-headed, clothed in scarlet. . . .

(下線は筆者)

貴族：“bareheaded” “bare-headed”[-right] [-status]

貴族を描写する際に、2回貴族が帽子をかぶらない状態“bareheaded (2)”が強調され、国王と貴族を対比して、国王しか帽子をかぶって食事をすることができないマナーが強調されている（トムはなんなくこれをやっているのであるが）。ここにおいても、[right] [status] といった意義素の点からコントラスト的な単語の選択が、国王と貴族との間に見られる。ここで興味深いのは、同じ [-right] [-status] として描かれている貴族であるが、彼らは、トムの [-right] [-status] とは違った意味を持つことである。ここに、貴族が、自分の地位を顕彰するためにわざわざ意味がない習慣を作っていることへの風刺が見られるように思われる。

本小説においては、この例で見られたような特徴がある例を数多く見ることができる。以下パラグラフ内のコントラストを、例を見ながら分析を進めてみよう。

その際、以下 2.2.1 word level contrast と 2.2.2 parallelism の2つのレベルから論を進めてゆく。

### 2.2.1 word level contrast

本 section では、パラグラフ内のコントラストを、単語のレベルから検証してみよう。

本小説で leading role を担っているのは、当然のことであるが、トムとエドワードの二人である。しかしながら、本小説には、3人目の主人公として捉えても良い人物であるヘンドン (Miles Hendon) が存在するので、彼の描写に目を向けてみることにしよう。次の場面は、本小説第11章からのもので、supporting role を担わされた人物 (宮廷人) と leading role を担っている人物 (マイルズ) の描写である。ここでは、両者の描写において使われる単語数や内容に対比表現が見られる。Mark Twain Project のテキストページの註によれば、描写Aは、ヘンリー 8世当時の *Holinshed Chronicle* における1510年ウエストminster寺院で開催されたバンケットの様子からの“close transcription”である。マーク・トゥエインが、この部分を作品に引用しながら、同章でこれに類似した描き方で、ヘンドンが描写されていることを考えると、この transcription である宮廷人の描写は、ヘンドンのそれとの比較対象として十分に意味があると思われる。これらの描写は、16世紀のイギリス宮廷人の服装の詳細を描写しているので、読者はその時代の服装を想像し再現でき、そこにリアリズムの意義を発見できるとも言えるだろう。

A : supporting role (宮廷人)

“Space being made, presently entered ①a baron and an earl appareled after the Turkish fashion in long robes of bawdkin powdered with gold; hats on their heads of crimson velvet, with great rolls of gold, girded with two swords, called scimitars, hanging by great bawdricks of gold. (36) Next came yet ②another baron and another earl, in two long gowns of yellow satin, traversed with white satin, and in every bend of white was a bend of crimson satin, after the fashion of Russia, with furred hats of gray on their heads; either of them having an hatchet in their hands, and boots with pykes” (points a foot long), “turned up. (55) And after them came③ a knight (0) , then ④the Lord High Admiral (0) , and ⑤with him five nobles, in doublets of crimson velvet, voyded low on the back and before to the cannell-bone, laced on the breasts with chains of silver; and, over that, short cloaks of crimson satin, and on their heads hats after the dancers' fashion, with pheasants' feathers in them. These were appareled after the fashion of Prussia(53). The ⑥torch-bearers(12), which were about an hundred, were appareled in crimson satin and green, like Moors, their faces



black. Next came in a ⑦mommarye (0).

Then the ⑧minstrels (3) , which were disguised, danced; and the⑨ lords and ladies (3) did wildly dance also, that it was a pleasure to behold.”

B : leading role(Miles Hendon)

The speaker was a sort of Don Caesar de Bazan in dress, aspect, and bearing. He was tall, trim- built, muscular. His doublet and trunks were of **rich material, but faded and threadbare**, and their **gold-lace adornments were sadly tarnished**; his **ruff was rumpled and damaged**; the **plume in his slouched hat was broken and had a bedraggled and disreputable look**; at his side he wore a **long rapier in a rusty iron sheath**; his swaggering carriage marked him at once as a ruffler of the camp. (86)

(数字、下線、太字は筆者)

(○数字は描かれている対象、括弧内の数字は対象を描いている語数である。以下の表を参照。)

以下の表は、上記引用部を supporting role の人物と leading role の人物（ヘンドン）を比較し、それぞれにおいて描写されている対象、対象を描いている語数、描かれている内容をまとめたものである。

	描かれている対象	対象を描いている語数	描かれている内容
supporting role	① a baron and an earl	36	服装
	② another baron and another earl	55	服装
	③ a knight	0	×
	④ the Lord High Admiral	0	×
	⑤ five nobles	53	服装
	⑥ torch-bearers	12	服装
	⑦ mommarye	0	×
	⑧ minstrels	3	動作
	⑨ lords and ladies	3	動作
leading role	Miles Hendon	86	服装/体格/服装の状態/身構え

これを見ると、supporting role の人物たち（宮廷人）の描写における語数（36、55、0、0、53、12、0、3、3）より、初めて登場した人物であるヘンドンの描写における語数（86）の方が多くことがわかる。そして、宮廷人①から⑨は、彼らの服装しか描写されていない一方、ヘンドン場合は、彼の服装、体格（“tall, trim-built, muscular” “swaggering carriage”）、服装の状態などが描かれている。

ここで、それぞれの服の描写に使われている表現を、具体的に見てみよう。

宮廷人の服の描写に使われている語①から⑨：

衣料：“crimson velvet” (2) “yellow satin” “white satin” “crimson satin” (2)  
“crimson satin and green” “furred hats”

飾り：“powdered with gold” “great rolls of gold” “great bawdricks of gold” “chains of silver” “pheasants’ feathers” “swords” “hatchet” “boots with pykes”

(括弧内の数字は出現回数)

ヘンドンの服の描写に使われている語：

“rich material, but faded and threadbare”

“gold-lace adornments were sadly tarnished”

“ruff was rumpled and damaged”

“plume in his slouched hat was broken and had a bedraggled and disreputable look”

“a long rapier in a rusty iron sheath”

前者①から⑨の服の描写では、“velvet” “satin” “furred”や“gold” “silver” “feathers” など高価な材料をあらわす言葉が使われている。これを元に書いたと思われるヘンドンの服の描写でも、宮廷人のそれと同じように“rich material” “velvet” “furred”（材料）/ “gold-lace adornments” “ruff” “plume” “rapier”（装飾品）のような [+gorgeous] の意義素を持つ表現が見られるが、これらの表現の後ろに“faded and threadbare” “sadly tarnished” “rumpled and damaged” “slouched hat was broken and had a bedraggled and disreputable look” “in a rusty iron sheath” [-gorgeous] の意義素を持つような表現が使われ、服がぼろぼろの状態を示す描写が加えられている。

服の描写①から⑨に使われている表現とヘンドンの服の描写に使われている表現を比べると、後者では、かつては①から⑨の服と同じような輝きを持った服が、今では廃れてし

まったという内容が、対比表現の繰り返しによって強調されていることがわかる。彼の服のこういった描写における繰り返しは、服だけでなく、彼の境遇を言い表す。

次は本小説第7章からの例である。ここでは、マーク・トウェインは、コントラストティブな表現を繰り返し使うことで、宮廷人への風刺を強めている。

All those that were present had been well drilled, within the hour, to remember that the prince was temporarily out of his head, and to be careful to show no surprise at his vagaries. These “vagaries” were soon on exhibition before them; but they only moved their compassion and their sorrow, not their mirth. It was a heavy affliction to them to see the beloved prince so stricken.

Poor Tom ate with his fingers, mainly; but no one smiled at it, or even seemed to observe it. He inspected his napkin curiously, and with deep interest, for it was of a very dainty and beautiful fabric— then said, with simplicity—

“Prithee take it away, lest in mine unheedfulness it be soiled.”

The Hereditary Diaperer took it away, with reverent manner, and without word or protest of any sort.

Tom examined the turnips and the lettuce with interest, and asked what they were, and if they were to be eaten; for it was only recently that men had begun to raise these things in England, in place of importing them as luxuries from Holland. His question was answered with grave respect, and no surprise manifested. When he had finished his dessert, he filled his pockets with nuts, but nobody appeared to be aware of it or disturbed by it. . . .

“I crave your indulgence—my nose itcheth cruelly! What is the custom and usage in this emergence? Prithee speed, for ‘tis but a little time that I can bear it.”

None smiled, but all were sore perplexed, and looked one to the other in deep tribulation for counsel. But behold, . . .

“Nay, it likes me not, my lord; it hath a pretty flavor, but it wanteth strength.”

This new eccentricity of the prince’s ruined mind made all the hearts about him ache, but the sad sight moved none to merriment.

Tom’s next unconscious blunder was to get up and leave the table just when the chaplain had taken his stand behind his chair, and with uplifted hands,

and closed, uplifted eyes, was in the act of beginning the blessing. Still nobody seemed to perceive that the prince had done a thing unusual.

(下線は筆者)

この場面では、王子に間違われているトムが、初めて宮廷での食事をする。トムは、マナーがわからず、宮廷の人から見るといわゆる「奇行」を連発してしまう。最愛の王子のそのような様子を見ることは、人達にとって大きな苦痛である。彼らは笑うこともできずに対応に困るが、同時にトム(王子)への思いやりや悲しみを表現することで対応している。

ここでの、マーク・トウェインの描写を細かく見てみると、トムの奇行、すなわち周りの人からみると [+funny] の行動に対して、人々の対応が [-funny] の意義素を持つ語句で表現されているのがわかる。それらは、以下の表にまとめられるだろう。

[+funny]	[-funny]
トムの奇行	人たちの対応・反応
"vagaries"	To be careful to show <u>no surprise</u> at his vagaries. These "vagaries" were soon on exhibition before them; but they only moved their <b>compassion</b> and their sorrow, not their mirth. It was a <b>heavy affliction</b> to them to see the beloved prince so stricken.
Tom ate with his fingers.	But <u>no one smiled</u> at it, or even seemed to <u>observe</u> it.
Tom said "Prithee take it away, lest in mine heedfulness it be soiled."	The Hereditary Diaperer took it away, with reverent manner, and <u>without word or protest</u> of any sort.
Tom examined the turnips and the lettuce with interest, and asked what they were, and if they were to be eaten.	His question was answered with grave respect, and <u>no surprise</u> manifested.
When he had finished his dessert, he filled his pockets with nuts.	But <u>nobody appeared to be aware</u> of it or <u>disturbed</u> by it.
Tom said with genuine anguish—"I crave your	<u>None smiled</u> , but all were <b>sore perplexed</b> , and looked
indulgence—my nose itcheth cruelly! What is the custom and usage in this emergence? Prithee speed, for 'tis but a little time that I can bear it."	one to the other <b>in deep tribulation for counsel</b> .

<p>Tom gazed at the dish (with fragrant rose-water in it, to cleanse his mouth and fingers with) a puzzled moment or two, then raised it to his lips and gravely took a draught.</p>	<p>But the <b>sad</b> sight moved <u>none to merriment.</u></p>
<p>Tom got up and leave the table just when the chaplain had taken his stand behind his chair, and with uplifted hands, and closed, uplifted eyes, was in the act of beginning the blessing.</p>	<p>Still <u>nobody</u> seemed to <u>perceive that the prince had done a thing unusual.</u></p>

この表からわかるように、宮廷人の反応は、“no(3)” “without(1)” “nobody(2)” “none(2)”などの否定表現に“surprise(2)” “smile(2)” “observe” “word” “protest” “be aware” “disturb” “merriment” “perceive”などの王子の奇行 [+funny] に対して通常起こるような反応を表す語が組み合わされて表現され、[-funny] の意義素が強められている（括弧内の数字は出現回数）。また、いくつかの例では、“compassion” “sorrow” “not mirth” “a heavy affliction” “sore perplexed” “deep tribulation for counsel” “sad” “the prince had done a thing unusual”（引用内太字）のような“unusual prince”に対する宮廷人の気持ちを表す表現も見られる。しかし、ここに見られる彼らの気持ち、すなわち、王子を愛して心配しているという気持ちは、実は、彼らの虚偽と偽善を表しているとも捉えることができるだろう。誰も狂人国王を望んでいないわけで、もし、マーク・トウェインが一回しか“To be careful to show no surprise at his vagaries”のような表現を使っていなければ、読者はこの点に気付かないかもしれない。しかし、マーク・トウェインは8回このパターンをくり返している（引用内下線部）。これにより、読者の注意は、トムから貴族の反応へと移り、トムがおかしいと思うことから貴族がおかしいと思うことへ導かれていく。ここに、王子を心配しているというより、自分の将来を心配している宮廷人に対するマーク・トウェインの風刺が見られるように思われる。

以下の描写へと続くが、ここでは、トムが食事する際にトムにサービスする宮廷人とサービス内容の間に、コントラスト的な表現がみられる。場面をユーモラスに描きながらも、貴族への風刺をさらに強めていることがわかるだろう。

A chaplain said grace, and Tom was about to fall to, for hunger had long been constitutional with him, but was interrupted by my lord the Earl of Berkeley, who fastened a napkin about his neck—for the great post of Diaperers to the

Princes of Wales was hereditary in this nobleman's family. Tom's cup-bearer was present and forestalled all his attempts to help himself to wine. The Taster to his highness the Prince of Wales was there, also, prepared to taste any suspicious dish upon requirement, and run the risk of being poisoned. He was only an ornamental appendage, at this time, and was seldom called upon to exercise his function; but there had been times, not many generations past, when the office of Taster had its perils, and was not a grandeur to be desired. Why they did not use a dog or a plumber seems strange; but all the ways of royalty are strange. My lord d'Arcy, First Groom of the Chamber, was there, to do goodness knows what— but there he was—let that suffice. The Lord Chief Butler was there, and stood behind Tom's chair, overseeing the solemnities, under command of the Lord Great Steward and the Lord Head Cook, who stood near. Tom had **three hundred and eighty-four servants** beside these, but they were not all in that room, of course, nor the quarter of them; neither was Tom aware, yet, that they existed.

(下線、太字は筆者。下線はサービスする宮廷人の呼び名、太字はサービスの内容)

まず、ここで気づく最初の対比表現は、多くの大人、それも貴族が、王子（トム）一人に使えているという点における、以下のような「多対1」の対比である：

貴族：“chaplain” “my lord the Earl of Berkeley” “cup-bearer” “Taster” “My lord d'Arcy” “The Lord Chief Butler” “the Lord Great Steward” “the Lord Head Cook” “quarter of hree hundred and eighty-four servants”  
「多」 [-superior]  
王子（トム）：「1」 [+superior]

「多対1」の対比により、貴族の上に君臨するトムつまり王子の高い地位を表す。さらにこの場面をよく見てみると、トムに使える貴族の呼び名と彼らが実際にトムに対してするサービス内容の間に“+solemn”と“-solemn”の対比があることに気づくだろう：

サービスする宮廷人の呼び名 [+ solemn]	サービスの内容 [- solemn]
a chaplain	To say grace
my lord the Earl of Berkeley	To fasten a napkin about prince's neck
Tom's cup-bearer	To pour wine
the Taster	To prepare to taste any suspicious dish upon requirement
My lord d'Arcy, First Groom of the Chamber	To be there
The Lord Chief Butler	To stand behind Tom's chair, overseeing the solemnities, under command of the Lord Great Steward and the Lord Head Cook
the Lord Great Steward	steward To stand near
the Lord Head Cook	cook To stand near
quarter of three hundred and eighty-four servants	To serve

王子が食事をする際に、その部屋で彼にサービスする宮廷人はほぼ300人である。部屋にはいないが王子にサービスする宮廷人はさらに多いと想像できるだろう。王子のそばで“要職”を占める貴族はただ“post of Diaperers”のような地味な仕事であっても、自慢して代々受け継ぐのである。そのみならず、何のためにその部屋にいるかわからないような人も要職者として存在している。これは、この部屋の豪華な飾りと同じように、ただ王室の高貴と権利を象徴しているに過ぎない。

さらに、表現をよく見てみると、“the Lord Chief Butler” “the Lord Great Steward” “the Load Head Cook” のように、貴族階級と役職を組み合わせた独自の呼び名が使われていることも興味深い。もちろん、これらは、“post of Diaperers” のようなマーク・トウェインが作り出した役職名と同様に場面をユーモラスにしている。

次はイギリスの法律に懲罰された人々の境遇を見てみよう。

- ① “We lost her through it. Her gift of palmistry and other sorts of fortune-telling begot for her at last a witch's name and fame. The law roasted her to death at a slow fire. It did touch me to a sort of tenderness to see the **gallant way she met her lot—cursing and reviling all the crowd that gaped and gazed around her, . . .**”
- ② Stand forth, Yokel, Burns, and Hodge—show your **adornments!**  
Thee stood up and stripped away some of their rags, exposing their

backs, crisscrossed with ropy **old welts** left by the lash; one turned up his hair and showed the place where a left ear had once been; another showed a **brand** upon his shoulder—the letter V—and a mutilated ear . . .

- ③ My good old blameless mother strove to earn bread by nursing the sick; one of these died, the doctors knew not how, so my mother was burnt for a witch, whilst my babes looked on and wailed. English law!—up, all, with your cups!—now altogether and with a cheer!—drink to **the merciful English law that delivered her from the English hell!** Thank you, mates, one and all.

(下線、太字は筆者)

ここに見られる以下の3例では、コントラスト的な表現が、人が、イギリスの法律と残酷な統治体制により、理不尽にも悪人として扱われている場面を描くことに貢献している。それぞれにおいて、アイロニーの要素が強められているのが興味深い。なお、本論文においては「アイロニー」を、意義素の点から見て [+ ] のものを [- ] に、[- ] のものを [+ ] に表現しているような例に対して用いている。

①は、単語同士の対比表現にみられるアイロニーである。ここでは、女性の罵倒の仕方が以下の対比表現によって描かれている。

“gallant” [+good]

“cursing / reviling” [-good]

②においても、以下のようなコントラスト的な単語の選択が、かつてひどい扱いを受けた証拠として、肌に残っているミミズ腫れの跡、すなわち、そういった跡を人に残すような理不尽な扱いをするイギリスの社会体制に対してのアイロニーを強調しているように思われる。

“adornments” [+beautiful]

“old welts” “brand” [-beautiful]

③は文脈における対比表現にみられるアイロニーである。病人を助けるような善良な女性が、結局はその病人の死の責任を取らされ、魔女として殺されてしまう。この内容は、すなわち、文脈的意義素で言うならば [+cruel] と捉えられるだろう。



the merciful English law = “merciful[-cruel] / English law [+cruel]” → アイロニー

さらに、“(death) delivered her from the English hell”において暗示されている内容は、イギリスの法律は死亡より悪いということを表す。“delivered”[+hope] (death) [-hope] English hell[-hope] イギリスの法律は庶民において、死亡より恐ろしい存在である。

これら三つの例から、残酷な統治下での平民の絶望的状态がよくわかる。マーク・トウェインは、アイロニーを使って、このような残酷なイギリスの法律と統治を批判しているように思われる。

次はマーク・トウェインが、エドワードと田舎の女性の行動と心理を描いている例である。自己犠牲を通じて自分を満足させる二人の様子がコントラストに描かれている。

The boy made a hearty and satisfying meal, and was greatly refreshed and gladdened by it. It was a meal which was distinguished by this curious feature, that rank was waived on both sides; yet neither recipient of the favor was aware that it had been extended. The goodwife had intended to feed this young tramp with broken victuals in a corner, like any other tramp, or like a dog; but she was so remorseful for the scolding she had given him, that she did what she could to atone for it by allowing him to sit at the family table and eat with his betters, on ostensible terms of equality with them; and the king, on his side, was so remorseful for having broken his trust, after the family had been so kind to him, that he forced himself to atone for it by humbling himself to the family level, instead of requiring the woman and her children to stand and wait upon him while he occupied their table in the solitary state due to his birth and dignity. It does us all good to unbend sometimes. This good woman was made happy all the day long by the applauses which she got out of herself for her magnanimous condescension to a tramp; and the king was just as self-complacent over his gracious humility toward a humble peasant woman.

(下線は筆者)

ここでは、語句に見られる意義素の対比表現の分析方法を、さらに、immediate context の内容に見られる対比の意義素分析に広げて応用してみたい。それぞれの行動と心理には、以下のような対比が見られる。

田舎の女性の行動 : allowing him to sit at the family table and eat with his betters, on ostensible terms of equality with them  
[+condescension /+humility]

エドワードの行動 : he forced himself to atone for it by humbling himself to the family level [ +condescension /+humility]

田舎の女性心理 : be happy all the day long by the applauses which she got out of herself for her magnanimous condescension to a tramp  
[+satisfied]

エドワードの心理 : be as self-complacent over his gracious humility toward a humble peasant woman [ +satisfied]

ここでは、女性とエドワード、二人ともそれぞれが、自分の地位を相手のレベルまで降したと思っている [+condescension /+humility]。女性は浮浪児 (“tramp”=エドワード) を自分の家族と同じテーブルで食事させている [+condescension /+humility] と思い、エドワードは女性やその家族 (平民) を国王 (自分) と同じテーブルで食事させている [+condescension /+humility] と思っている。二人とも相手に対し寛大である自分自身に自己満足している [+satisfied]。しかし、読者の God's perspective から見ると、二人の自己満足は一種のドラマティック・アイロニーとなっていることが理解できて非常に面白い。ここに、人間の偽善を風刺するマーク・トウェインが伺えるようにも思える。そして、こういった偽善への風刺は、この小説のメインテーマの一つであろう。

次は本小説第17章からの例を見てみよう。マーク・トウェインは、イギリスの卑賤な平民の描写の中で、イギリスの法律の残酷さと貴族による統治への批判を強めている。この例でも、前例と同じく、語句に見られる意義素の対比表現を、さらに、immediate context の内容に見られる対比へ広げ、意義素分析を応用してみたい。

まず、ジョン・カンティが、人を殺した経験があるということを公言する場面を見てみよう。

… and when he (John) said he had “accidentally” killed a man, considerable satisfaction was expressed; when he added that the man was a priest,

he was roundly applauded, and had to take a drink with everybody. Old acquaintances welcomed him joyously, and new ones were proud to shake him by the hand.

(括弧内は筆者)

この場面は、卑賤な平民からなるグループにおいて、ジョン・カンティが悪事をするほどグループに褒められるという場面であり、ジョン・カンティのような“悪人たち”の恐ろしさと毒々しさが表わされている。ジョンの悪事の程度とグループの歓喜の程度をいかにアンバランスに、また、ユーモラスに表現するかにおいて、マーク・トウェインは、下記に見られるような対比表現を利用しているように思われる。

“he had “accidentally” “ killed a man” [-good] [+evil] → [-legitimate] → [+sad]

→

“considerable satisfaction was expressed” [+welcome] → [-sad]

“he added that the man was a priest” [-good] [+evil] → [-legitimate] [-religious]

→ [++sad]

→

“he was roundly applauded”

“had to take a drink with everybody” [++welcome] → [---sad] “old acquaintances welcomed him joyously, ”

“new ones were proud to shake him by the hand. ” [+++welcome] → [---sad]

このようにユーモラスに描かれている彼らの素行の悪さは、文脈を広げて見ると、後半に敷かれた伏線の中で、残酷な統治により、彼らの多くが悪人とならざるを得ない状況があったが故のものであることを読者は知らされる。

本2.2.1 word level contrast では、paragraph 内のコントラストの例を5つ挙げた。これらから注目できることは、以下の2点であろう。それぞれの例におけるコントラストを再確認をしておこう。

1 対比表現の繰り返しによって、表したい内容が強調されている。例1では、貴族の服の描写に使われている表現とマイルズ・ヘンドンの服の描写に使われている表現を比べると、後者では、かつては貴族の服と同じような輝きを持った服が、今では廃れてしまったという内容が、対比表現の繰り返しによって強調されていることがわかる。マイルズ・ヘ

ンドンの服のこういった描写における繰り返しは、服だけでなく、彼の境遇を言い表すことにも貢献しているように思われる。例2では、マーク・トゥェインは8回同じパターン(トムの奇行 [+funny] → 人たちの対応・反応 [-funny])を繰り返している。これにより、読者の注意は、トムから貴族の反応へと移り、トムがおかしいと思うことから貴族がおかしいと思うことへ導かれていく。ここに、王子を心配しているというより、自分の将来を心配している虚偽と偽善な宮廷人に対するマーク・トゥェインの風刺が見られるように思われる。

2 対比表現の繰り返しによって、ユーモア、アイロニー、風刺などの要素が強調されている。ユーモアの例としては、例2、例5が適例であろう。例2では、トムが食事する際にトムにサービスする人とサービス内容の間にコントラストがみられ、場面をユーモラスに描きながらも、貴族への風刺をさらに強めていることがわかるだろう。例5では、ユーモラスに描かれている卑賤な平民の素行の悪さは、文脈を広げて見ると、彼らの多くが、残酷な統治により、悪人とならざるを得ない状況があったことを読者は知らされる。例3では、マーク・トゥェインは、アイロニーを使って、残酷な統治下での平民の絶望的状态を描いており、残酷なイギリスの法律と統治を批判しているように思われる。風刺としては、例4で、人間の偽善を風刺するマーク・トゥェインが伺えるように思える。

### 2.2.2 parallelism

ここで言う parallelism とは、類似の文章構造の中でフレーズや単語(varied element)が変奏(vary)する修辞法を指す。本小説では、特に、コントラスト的な変奏が多出する。以下、適例を見ていくこととする。

以下は、本小説の冒頭部分からである。

In the ancient city of London, on a certain autumn day in the second quarter of the sixteenth century, a boy was born to a poor family of the name of Canty, who did not want him. On the same day another English child was born to a rich family of the name of Tudor, who did want him. All England wanted him, too. . . . There was no talk in all England but of the new baby, Edward Tudor, Prince of Wales, who lay lapped in silks and satins, unconscious of all this fuss, and not knowing that great lords and ladies were tending him and watching over him—and not caring, either. But there was no talk about the other baby, Tom Canty, lapped in his poor rags, except among the family of paupers whom

he had just come to trouble with his presence.

(中略は筆者)

まず、両者が生まれたことが報告されている部分を見比べてみる。

Tom:

In the ancient city of London,  
on a certain autumn day (in the second quarter of the sixteenth century,) a boy  
was born  
to a poor family of the name of Canty, who did not want him.

Edward:

(In the ancient city of London, )  
On the same day (in the second quarter of the sixteenth century,) another  
English child was born  
to a rich family of the name of Tudor, who did want him.

これを見るとわかるように、トムとエドワードの誕生を報告する部分において、

on + 名詞句 (時に関するもの) + day

主語 + was born

to + a + 形容詞 + family of the name of + 固有名詞

who did + (not) + want him

のような同構文が使われ、それらの構文の中で、名詞句“a certain autumn day / the same day”、主語“a boy / another English child”、形容詞“poor / rich”、固有名詞“Canty / Tudor”、not の有無、などの部分で文脈的にコントラスト的な意味を持つエレメントが使用されていることがわかる。このような parallelism 表現により、トムとエドワードの誕生に関する対比が強調されている。

エドワードとトムの誕生の様子や、それに対する周りの反応が描かれている部分を、対比という点からさらに詳細に見てみよう。

Tom:

But there was no talk about the other baby, Tom Canty,  
(who) lapped in his poor rags,

Edward:

There was no talk in all England but of the new baby, Edward Tudor, Prince of  
Wales, who lay lapped in (his) silks and satins,

これらの例では、以下のような parallelism が見られる。

there was no talk + prepositional phrase + 固有名詞,  
who + 動詞 + in his + 名詞,

これらの parallelism 構文の中で、prepositional phrase “about the other baby / (in all England but) of the new baby”、固有名詞 “Tom Canty / Edward Tudor/Prince of Wales”、動詞 “lapped/ lay lapped”、名詞 “poor rags / silks and satins”、などの部分で文脈的に逆の意味、すなわち、[+ high class / -high class] [+ rich/ -rich]の意義素を持つエレメントが使用されていることがわかる。このような表現により、トムとエドワードの階級の格差と貧富の格差に関する対比が強調されている。

次は本小説第18章からの例である。ここでは、エドワードが牛と一緒に寝る様子がコントラスト的に描かれることで、流浪しているエドワードが肉体的な苦痛ばかりでなく孤独感を感じている状態が強調されている。

(ジョン・カンティーから逃げ出したエドワードは、ある倉庫で子牛に出会いそれに寄り添って寝る。)

The king was not only delighted to find that the creature was only a calf, but delighted to have the calf's company; for **he had been feeling so lonesome and friendless that the company and comradeship of even this humble animal was welcome. And he had been so buffeted, so rudely entreated by his own kind, that it was a real comfort to him to feel that he was at last in the society of a fellow creature that had at least a soft heart and a gentle spirit, whatever loftier attributes might be lacking.** So he resolved to waive rank and make friends with the calf.

(太字は筆者)

he had been+ feeling so lonesome and friendless+ that + the company and comradeship of even this *humble animal was welcome*

he had been+ so buffeted, so rudely entreated by his own kind +that + it was a real comfort to him to feel that he was at last in the society of a fellow creature that had *at least* a soft heart and a gentle spirit, whatever loftier attributes might be lacking

he had been + [孤独] + that + [卑しい動物のお供と友情でさえ歓迎している]  
 → he had been + [-contentment] + that + [+contentment]

he had been + [殴られる/強制される] + that ~ [少なくとも柔らかい心と穏やかな精神を持った生き物と一緒にいると感じるのは本当に慰めであった]  
 → he had been + [-contentment] + that + [+contentment]

エドワードは、流浪の生活で体だけではなく心も痛めつけられる。王子である時、エドワードは全てに対して、高いレベルの人や物を望んでいる。しかし、“humble animal was welcome” “at least” “whatever”などの表現から見ると、現在の境遇ではエドワードがそういった考えを譲歩しているという implication が見てとれる。生活が満足できないほど、心は簡単なことで満足しやすくなる。ここに、まだ王子の自尊心を持っているが妥協を学んでいるエドワードが見られるが、それは、ここでの描写に見られる上記のような [-contentment] [+contentment] の意義素を持つ語句によるマーク・トウェインの表現において、効果的に表されている。

ここにあげた paragraph 内における parallelism の例では、類似の構文で、同じ部分は統合し、変奏部分だけに注目し、コントラストの表現を分析してきた。本小説の冒頭部分の例では、トムとエドワードの誕生に関する対比、トムとエドワードの階級の格差と貧富の格差に関する対比が強調されている。また、本小説第18章からの例では、まだ王子の自尊心を持っているが妥協を学んでいるエドワードが見られる。

本小説の冒頭部分の例では、“on + 名詞句 (時に関するもの) + day/主語 + was born/ to + a + 形容詞 + family of the name of + 固有名詞/ who did + (not) + want him”のような同構文が使われていることがわかった。また、“there was no talk +

prepositional phrase + 固有名詞/who+動詞+in his+名詞”のような同構文、さらに本小説第18章からの例では、he had been+ [-contentment] + that + [+contentment]”のような同構文が使われている。そして、それぞれの違う部分に注目すると、本小説の冒頭部分の例では、名詞句 “a certain autumn day / the same day”、主語 “a boy / another English child”、形容詞 “poor / rich”、固有名詞“Canty / Tudor”、not の有無、などの部分で、文脈的に逆の意味を持つエレメントが使用されていることがわかる。さらに、prepositional phrase “about the other baby / (in all England but) of the new baby”、固有名詞“Tom Canty / Edward Tudor/Prince of Wales”、動詞“lapped / lay lapped”、名詞“poor rags / silks and satins”、などの部分で文脈的に逆の意味、すなわち、[+ high class / -high class] [+ rich/ -rich] の意義素を持つエレメントが使用されていることがわかる。また本小説第18章からの例では、“孤独”と“殴られる/強制される”は同じ意義素 ([-contentment]) で、“卑しい動物のお供と友情でさえ歓迎している”と“少なくとも柔らかい心と穏やかな精神を持った生き物と一緒にいると感じるのは本当に慰めであった”も同じ意義素 ([+contentment]) で概念化できるだろう。この例は他の例とは違い、違う部分は文脈的に同じ意味を持っているということも指摘しておきたい。

### 2.3 sentence 内のコントラスト

本 section では、センテンス内のコントラストと言う点から眺めてみよう。ここでは、センテンスの数によって、2.3.1 複数の sentence 内のコントラスト、2.3.2 1 つの sentence 内のコントラストの2つの部分に分ける。そして、前者、後者の中で、情報のレベルによって、さらにそれぞれを次のように word level contrast と parallelism の2つの部分に分ける。2.3.1.1 word level contrast、2.3.1.2 parallelism、2.3.2.1 word level contrast、2.3.2.2 parallelism。

#### 2.3.1 複数の sentence 内のコントラスト

本 section では、複数のセンテンス内のコントラストと言う点から眺めてみよう。情報のレベルによって、さらに 2.3.1.1 word level contrast、2.3.1.2 parallelism の2つの部分に分ける。

##### 2.3.1.1 word level contrast

本 section では、複数の sentence 内のコントラストを、単語のレベルから検証してみよう。



マーク・トウェインが、コントラスト表現の中で、トムが無実の罪を着せられた平民を赦免する場面を描いている例（本小説の第15章）を見てみよう。

（以下において、最初の発話はトム、次の二つは貴族のものである。彼らは、無実の罪を着せられた平民を赦免するトムを褒めている。）

“Let the prisoner go free—it is the king’s will!” . . .

“This is no mad king—he hath his wits sound.”

“How sanely he put his questions—how like his former natural self was this abrupt, imperious disposal of the matter!”

この例において注目すべきは、後半二人の貴族の発言“*This is no mad king—he hath his wits sound.*”と“*How sanely he put his questions—how like his former natural self was this abrupt, imperious disposal of the matter!*”であろう。この表現では、以下のような対比が見られる。

“no mad” [+rational] “hath his wits sound” [+rational] “sanely” [+rational]  
“abrupt” [-rational] “imperious” [-rational]

文脈から見ると、この場面で貴族がトムを褒めるのには、二つの理由が考えられるだろう。一つ目は、トムが、平民との質疑応答を通して、死刑と決まっていた平民が実は無罪だと判断できたということである（“no mad” [+rational] “hath his wits sound” [+rational] “sanely” [+rational]）。

二つ目は、“Let the prisoner go free—it is the king’s will!”においてトムが命令を下すやり方が、貴族から見ると「正気な」王子と父ヘンリー8世、すなわち物腰に“abrupt” [-rational] “imperious” [-rational] の要素を持っている人物、に似ているということである。

しかし、これらは意義素 [rational] という点から考えると、逆の意味を持っていると言えるだろう。一つ目の [+rational] は、トム自身の特徴である。二つ目の [-rational] は、統治者のそれであり、これが貴族は喜んでいる本当の理由であろう。ここに見られるコントラストは、貴族階級の独断と傲慢的な特徴を風刺していると思われる。

次は本小説第3章からの例を見てみよう。ここでは、アイロニーの効果が強められてい

るのが興味深い。

The mother and father had a sort of bedstead in the corner, but Tom, his grandmother, and his two sisters, Bet and Nan, were not restricted—they had all the floor to themselves, and might sleep where they chose. There were the remains of a blanket or two and some bundles of ancient and dirty straw, but these could not rightly be called beds, for they were not organized; they were kicked into a general pile, mornings, and selections made from the mass at night, for service.

(下線は筆者)

ベッドはないが、部屋で好きなところで寝られるという描き方に、アイロニー、すなわち、以下に示すような description と reality の間に見られる [+space] / [-space],[+positive] / [-positive] のコントラスト表現からなるアイロニーの修辞法が使われていることがわかる。ここに、「寝る場所を自由に選べる」と言う表現による貧乏なトム一家の現状に対する風刺が見られ、マーク・トウェインのユーモアの一端が見てとれると言えるのではないだろうか。

description: all [+space] where they chose

→ [+positive]

reality: these could not rightly be called beds = no bed [-space]

→ [-positive]

上記例は以下のように続く。

・・・ and that away in the night his (Tom's) starving mother would slip to him stealthily with any miserable scrap or crust she had been able to save for him by going hungry herself, notwithstanding she was often caught in that sort of treason and soundly beaten for it by her husband.

(括弧及び下線は筆者)

ここでは、以下のような[kind]という意義素上のコントラストの表現が見られる。

reality: "his starving mother would slip to him stealthily with any miserable scrap or crust she had been able to save for him by going hungry herself."  
[+kind]

description: treason [-kind]

トムの母親が飢えている自分の子どもに食べ物をやる行為 [+kind] は、通常、心優しい行為として認識されることである。しかし、マーク・トウェインは、このような母親の行為を、あえて父親の視点から選ばれた "treason" [-kind] という単語を使ってリフレーズしている。ここにマーク・トウェインのアイロニーを見ることができる。マーク・トウェインは、トムの父親のような是非曲直がわからない悪人を風刺していると思われる。

次は本小説第7章における宮廷での食事の場面をコントラストの点から詳細に眺めてみよう。この場面は以下の描写から始まる。

Somewhat after one in the afternoon, Tom resignedly underwent the ordeal of being dressed for dinner. He found himself as finely clothed as before, but everything different, everything changed, from his ruff to his stockings. He was presently conducted with much state to a spacious and ornate apartment where **a table** was already set—for **one**. Its furniture was all of massy gold, and beautified with designs which well nigh made it priceless, since they were the work of Benvenuto. The room was half filled with noble servitors.

(下線、太字は筆者)

ここで注目すべきは、マーク・トウェインのコントラストの表現からもたらされる風刺であろう。作者は、トムが初めて宮廷で食事する状況を描く際、コントラストの修辭法を使い、貴族生活の豪華さとおかしさを強調し、貴族階級を風刺している。

単数+地位: "a table" "for one" [-quantity] [+status]

多数+価値: "much" "all of" "half filled with" "spacious" [+quantity]

"ornate" "massy gold" "beautified" "the work of Benvenuto" "priceless" [+luxury]

contextual meaning において "much" "spacious" "ornate" "all of" "massy gold"

“beautified” “the work of Benvenuto” “priceless” “half filled with” など「数量」「価値」「重要さ」「豪華さ」([+quantity] [+luxury])などを表す語句が、宮廷の部屋や家具や貴族を繰り返し修飾していることに気づくだろう。これらの表現により、トムが案内された部屋やそこに使える貴族たちの豪華な様子が強調されている。一方で、トムが付くテーブルが、そういった豪華な環境の中で一つだけ“a table” ([-quantity])としてポツンと存在している、それもトム一人のため“for one” ([+status])に用意されているわけである。

ここに、貴族に対して繰り返し使われている修飾との対比が見られ、豪華さを過度に描写することで、多くの富を掌握している王室への風刺が強調されている。そして、この豪華さに対する風刺は、この場面におけるトムの孤独感をも強調しているように思われる。

### 2.3.1.2 parallelism

本 section では、複数の sentence 内のコントラストを、parallelism のレベルから検証してみよう。

本小説第11章からの例を見てみよう。この例では、マーク・トウェインは、場面をコントラスト的に描くことで、平民と貴族という階級区別がある英国社会への風刺を強めている。以下はトムが王室のはしけに乗って川岸の美しい景色を見ているからの場面である。ここでは、マーク・トウェインが、無生物主語を含む比喩、及び、視覚的・聴覚的描写を使って、読者に貴族が宴会を参加する際の場面をリアリスティックに再現している。

The royal barge, attended by its gorgeous fleet, took its stately way down the Thames through the wilderness of illuminated boats. The air was laden with music; the river banks were beruffled with joy-flames; the distant city lay in a soft luminous glow from its countless invisible bonfires; above it rose many a slender spire into the sky, encrusted with sparkling lights, **wherefore in their remoteness they seemed like jeweled lances thrust aloft;** as the fleet swept along, it was greeted from the banks with a continuous hoarse roar of cheers and the ceaseless flash and boom of artillery.

(下線、太字は筆者)

#### ①修辭法：

“the distant city lay in a soft luminous glow from its countless invisible bonfires”  
(inanimate subject personification)

“wherefore in their remoteness they seemed like jeweled lances thrust aloft”  
(simile)

②senses:

“The royal barge, attended by its gorgeous fleet, took its stately way down the Thames through the wilderness of illuminated boats. . . . ; the river banks were beruffled with joy-flames; the distant city lay in a soft luminous glow from its countless invisible bonfires; above it rose many a slender spire into the sky, encrusted with sparkling lights, wherefore in their remoteness they seemed like jeweled lances thrust aloft; as the fleet swept along, . . . ” (visual sense)

“The air was laden with music . . . it was greeted from the banks with a continuous hoarse roar of cheers and the ceaseless flash and boom of artillery.”  
(auditory sense)

以下の場面では、プリンスとして扱われているトムが、目の前の壮大な光景に驚いている一方で、そういった光景が日常のものとして貴族のエリザベスやジェーン・グレイには映っている。

To Tom Canty, half buried in his silken cushions, these sounds and this spectacle were a wonder unspeakably sublime and astonishing. To his little friends at his side, the princess Elizabeth and the lady Jane Grey, they were nothing.

(下線は筆者)

眼前の光景を、言葉では言い表せないほど崇高で驚くべき奇跡だと思っているトムと感動もせずにそれを眺めているエリザベスとジェーン・グレイとのコントラストが、描かれている。ここでは、以下のような *parallelism* が効果的に利用されている。

Parallelistic construction:

To + 人、S + be + 補語

Variable elements:

Tom Canty [- high class]

the princess Elizabeth and the lady Jane Grey [+ high class]

a wonder unspeakably sublime and astonishing [+astonishing]

nothing [-astonishing]

このような描写により、こういった壮大な光景に対する両者の慣れに関するコントラスト、すなわち、トム=[+astonished]、エリザベスとジェーン・グレー=[-astonished]というコントラストが浮き彫りになっており、両者の階級の違いが強調されている。しかしながら、語り手は、実際は階級差があるトムとエリザベス、ジェーン・グレーを “To his little friends at his side” という句に見られる “friends” [-class distinction] という語によって、彼らが気づかないところで子供として彼らを繋いでいる。一種のドラマティック・アイロニーと見て良い面があるだろう。ここに、語り手マーク・トウエインのイギリス封建時代における階級差別、また、その社会システムに子供たちを巻き込んでいる体制への風刺が見られるように思われる。

次は本小説第1章でのエドワードと貴族の描写における parallelism を眺めてみよう。

There was no talk in all England but of the new baby, Edward Tudor, Prince of Wales, who lay in silks and satins, unconscious of all this fuss, and not knowing that great lords and ladies were tending him and watching over him—and not caring, either.

Edward:

unconscious (un + conscious=no conscious)

not knowing

not caring

great lords and ladies :

tending

watching over

ここに見られるように、エドワードが主語となる場合は、“no + adj. / not + doing” のように、形容詞や動詞に、否定的な意味を加えた表現が使われている。貴族が主語となる

場合は、このような否定的な表現の付加はなく、“tending”や“watching”のように主語の能動的な意思・行動が含意される動詞が使われている。このような表現は、対比という視点から見ると、[-willing / +willing]の対比表現になっていることがわかる。このような表現により、エドワードが周りの人や環境（地位、権利、富）に関心がない状態と貴族がエドワード（地位、権利、富）に関心を持つコントラストな状態が強調されている。

このことは、単に、王子と貴族との対比ばかりでなく、赤ん坊と大人とのそれも描いていると言えるのではないだろうか。つまり、赤ん坊は心が純粹で階級やお金などに興味がないが、人は成長過程で富と階級を重視するようになる、ということも案に描かれているとも言えるだろう。

2.3.1.2 の最初の例では、壮大な光景を眼前に見るトムと貴族両者の反応に関するコントラストによって、語り手の階級差別への風刺が見られるように思われる。また、同 section の次の例では、王子と貴族との対比で貴族が地位、権利、富に関心を持つコントラストな状態が強調されている。

複数の sentence 内のコントラストとして、2.3.1.1 および 2.3.1.2 において、5つの例を検討してきたが、これらの例の中に、マーク・トウェインのユーモア、アイロニー、風刺などを見ることができるのは興味深い。

例えば、2.3.1.1 の2番目の例では、ベッドもないし、部屋で好きなところで寝られるという描き方に、アイロニーの修辞法が使われていることがわかる。ここに、「寝る場所を自由に選べる」と言う表現による貧乏なトム一家の現状に対する風刺が見られ、マーク・トウェインのユーモアの一端も見られると言えるのではないだろうか。そして、トムの母親が飢えている自分の子どもに食べ物をやる行為は、通常、心優しい行為として認識されることである。しかし、マーク・トウェインは、このような母親の行為を、“裏切り”という単語を使って表している。ここに彼のアイロニーを見ることができる。さらに、同 section の3番目の例では、繰り返し使われている前述の修飾語との対比が見られ、描写されている過度な豪華さは、多くの富を掌握している王室への風刺を強調している。そして、この豪華さに対する風刺は、この場面におけるトムの孤独感をも強調しているように思われる。

### 2.3.2 1つの sentence 内のコントラスト

本 section では、1つのセンテンス内のコントラストと言う点から眺めてみよう。情報のレベルによって、さらに 2.3.2.1 word level contrast, 2.3.2.2 parallelism の2つの部分に分ける。

### 2.3.2.1 word level contrast

本 section では、1つの sentence 内のコントラストを、単語のレベルから検証してみよう。

マーク・トゥェインは、場面描写や人物描写において、しばしば形容詞を並列する方法を用いている。第2章からの例を見てみよう。

London was fifteen hundred years old, and was a great town—for that day. It had a hundred thousand inhabitants—some think double as many. ①The streets were very narrow, and crooked, and dirty, especially in the part where Tom Canty lived. . . .

The house which Tom's father lived in was up a foul little pocket called Offal Court, out of Pudding Lane. ②It was small, decayed, and rickety, but it was packed full of wretchedly poor families. Canty's tribe occupied a room on the third floor.

There was a cold drizzle of rain; the atmosphere was murky; it was a melancholy day. ③At night Tom reached home so wet and tired and hungry that it was not possible for his father and grandmother to observe his forlorn condition and not be moved—after their fashion; wherefore they gave him a brisk cuffing at once and sent him to bed.

(下線および番号は筆者)

上記本文において、特に①、②、③部分の描写に注目してみよう。

- ① The streets were very narrow, and crooked, and dirty. . . .
- ② It was small, decayed, and rickety. . . .
- ③ At night Tom reached home so wet and tired and hungry that . . . .

マーク・トゥェインは①においてロンドンの街を、②においてトムが住む建物を、③では疲れて帰ったトムの様子を描いている。ここでは、それぞれの表現において、下線に見られるような、三つの形容詞①“narrow”/“crooked”/“dirty”、②“small”/“decayed”/“rickety”、③“wet”/“tired”/“hungry”が、描かれる際に使われている。これらが、単に、三つの形容詞が続けて一つのものや人を修飾しているばかりでなく、



文脈的に見てほぼ同じ意義素（この場合は[+shabby]）を持っていることが興味深い。

このような表現により、読者に環境やキャラクターの状態、すなわち、①ロンドンの街が汚くて狭いこと、②トムが住む建物が小さくて倒れそうなこと、③家に帰ったトムのみすぼらしい様子、などが強調されている。

次に、これらの例をさらにコントラストの表現の観点から眺めてみよう。例えば、②の例であるが、ここでは、以下の図に示すような [space] [quantity] [wealth] といった意義素間でのコントラストの表現が見られる。

② It was small, decayed, and rickety, but it was packed full of wretchedly poor families. small [-space]

full of [+ quantity]

トムが住む建物はスペースが小さいが住んでいる人数が多い。

full of [+ quantity] wretchedly poor [-wealthy]

住んでいる人数が多いがお金持ち人がいない。

マーク・トウェインが、一つのセンテンスの中で、2回連続の対比表現を利用して、この建物に住んでいる人（トムと家族も含む）の生活環境と経済状況の厳しさを強調していることがわかる。

### 2.3.3.2 parallelism

本 section では、1つの sentence 内のコントラストを、parallelism のレベルから検証してみよう。

本小説第22章からの例を見てみよう。

(ヒューゴ (Hugo) とエドワード、二人が自分の目的を達成するために、必死にチャンスをかかっている。)

Very well. All in good time Hugo strolled off to a neighboring village with his prey; and the two (Edward & Hugo) drifted slowly up and down one street after another, the one watching sharply for a sure chance to achieve his evil purpose, and the other watching as sharply for a chance to dart away and get free of his infamous captivity forever.

(括弧及び下線は、筆者)

下線部では、以下のような parallelism の中に、コントラストが見られる。

the one (人) watching (as) sharply for a (sure) chance to +目的

the one (Hugo) watching (as) sharply for a (sure) chance to +目的  
(achieve his evil purpose) [+entrap]

the other (one: Edward) watching (as) sharply for a (sure) chance to +目的  
(dart away and get free of his infamous captivity forever.) [-entrap]

ここでは、マーク・トウェインが、ほぼ同じ構文 the one watching sharply for a (sure) chance to+目的”で、ヒューゴとエドワードを描写し、それぞれの目的に見られる悪と善を強調している。ヒューゴの目的は、エドワードを陥れること [+entrap] であり、エドワードの目的は、悪人 Hugo から逃げ出すこと [-entrap] である。

次は本小説第3章からの例を見てみよう。このコントラスト表現においては、アイロニーが見られる。

(トムが門衛にいじめられていた時、エドワードが現れ、トムを保護し、彼と共に王宮へ入る。)

The soldier said:

“Mind thy manners thou young beggar!”

The crowd jeered and laughed; but the young prince sprang to the gate with his face flushed and his eyes flashing with indignation, and cried out:

“How dar’st thou use a poor lad like that! How dar’st thou use the king my father’s meanest subject so! Open the gates and let him in!”

You should have seen that fickle crowd snatch off their hats, then. You should have heard them cheer and shout “Long live the Prince of Wales!”

The soldiers presented arms, with their halberds, opened the gates, and presented again as **the little Prince of Poverty** passed in, in his fluttering rags, to join hands with **the Prince of Limitless Plenty**.

the (little) Prince of +N.  
 the little Prince of Poverty [-wealth]  
 the Prince of Limitless Plenty [+wealth]

注目すべきは太字の部分である。ここでは、名詞“Poverty / Limitless Plenty”、の部分で文脈的に逆の意味、すなわち、[-wealth] [+wealth] の意義素を持つ語句が使用されていることがわかる。さらにそれらは、同型の構文の中で、variable element として使われていることがわかる。このような parallelism 表現により、トムとエドワードの階級や貧富の格差に関する対比が強調されている。特に、トムに対するアイロニー表現ととらえられるだろう。しかしながら、貧富の差はあれ、二人が prince と呼ばれるわけであるから、これは、二人の子供を同じ土俵に置いているとも思われ、また、この場面以降二人が経験しなければならないそれぞれの prince としての生活を imply しているとも思われる。この場合は、ドラマティック・アイロニーともいえるだろう。

以上、1つの sentence 内のコントラストとして、parallelism の例を2つ挙げた。最初の例では“the one (人) watching (as) sharply for a (sure) chance to +目的”のような同構文が使われる。2番目の例で“the (little) Prince of +N.”のような同構文が使われている。それぞれの変奏部分 (variable element: 単語レベル、フレーズを含む) に注目すると、最初の例では人“Hugo /エドワード”が違い、目的“achieve his evil purpose/dart away and get free of his infamous captivity forever.”の部分で文脈的に逆の意味を持って ([+entrap] / [-entrap])、それぞれの目的に見られる悪と善を強調している。2番目の例では、“名詞“Poverty / Limitless Plenty”の部分で文脈的に逆の意味、すなわち、[-wealth] [+wealth] の意義素を持つ語句が使用されていることがわかる。

## 2.4 unusual collocation (oxymoron)

本 section では、unusual collocation の修辞法を眺めてゆく。定義通りに言えば、unusual collocation は、通常の連語関係ではまれである語と語の連結表現のことを指すが、本論文では特に意義素的に [+ ] と [- ] が共起しているような collocation、つまり、oxymoron と捉えられる例を取り扱う場合が多い。

本小説第3章からの例の例を見てみよう。

(王子エドワードは初めてトムと出会って、トムを食事に紹介する。)

Half a dozen attendants sprang forward to—I don't know what; interfere, no doubt. But they were waved aside with a right royal gesture, and they stopped stock still where they were, like so many statues. Edward took Tom to a rich apartment in the palace which he called his cabinet. By his command, a repast was brought such as Tom had never encountered before except in books, the prince, with princely delicacy and breeding, sent away the servants, so that his **humble guest** might not be embarrassed by their critical presence; then he sat near by and asked questions while Tom ate.

(太字体は筆者)

“humble” : [-rank]

“guest” : [+rank]

この段落で、マーク・トウェインは“humble”を使わなくても文脈に影響を与えない。“humble”を使う理由は、王子に誘われてもトムが貧兒である事実を変えないことを強調するだろう。

次は、本小説の第 28 章に見られる例である。

(ヘンドン。エドワードは自分の代わりに拷問を受けるヘンドンに感動し、彼に伯爵の位を与える。そんなエドワードの行為に対してヘンドンが感動している。)

Hendon was touched. The water welled to his eyes, yet at the same time the **grisly humor** of the situation and circumstances so undermined his gravity that it was all he could do to keep some sign of his inward mirth from showing outside. To be suddenly hoisted, naked and gory, from the common stocks to the Alpine altitude and splendor of an Earldom, seemed to him the last possibility in the line of the grotesque.

(太字体は筆者)

この例において注目すべきは、“grisly humor”であろう。この表現では、以下のような対比が見られる。

“grisly”[-negative]

“humor”[+negative]

マーク・トウェインは、“grisly”[-negative]を使って、“humor”[+negative]を修飾し、ヘンドンの現状の悲惨さを強調している。その上、悲惨な現状とエドワードとヘンドンの間の感情を対比しながら、逆境においても離れない二人の感情を謳歌している。

次の例は、本小説の第27章に見られる。

(“国王が狂ってしまったという”Andrewsの発言に対して、エドワードはすぐに「国王は狂ってはいない。あなたは、この扇動的なうわさ話よりも、あなたに近い問題で忙しくする方が有利だと思うでしょう。」と言う。)

His majesty (Edward) glared at the old man (Andrews) and said—

“The king is not mad, goodman—and thou’lt find it to thy advantage to busy thyself with matters that nearer concern thee than this seditious prattle.”

“What doth the lad mean?” said Andrews, surprised at this **brisk assault** from such an unexpected quarter. Hendon gave him a sign, and he did not pursue his question, but went on with his budget—

(太字体は筆者)

この例において注目すべきは、“brisk assault”であろう。この表現では、以下のような対比が見られる。

“brisk”[-negative]

“assault”[+negative]

マーク・トウェインは、“brisk”[-negative]を使って、“assault”[+negative]を修飾し、ユーモラスな言葉でエドワードの言葉の攻撃性と無礼さを和らげている。

次は本小説第19章からの例を見てみよう。

(田舎の女性がエドワードを引き取る。彼女はエドワードに料理を作らせるが、彼は炊飯器が焦がし、彼女はエドワードを叱責する。)

The intent was good, but the performance was not answerable to it; for this

king, like the other one, soon fell into deep thinkings concerning his vast affairs, and the same calamity resulted—the cookery got burned. The woman returned in time to save the breakfast from entire destruction; and she promptly brought the king out of his dreams with a brisk and **cordial tongue-lashing**. Then, seeing how troubled he was, over his violated trust, she softened at once and was all goodness and gentleness toward him.

(太字体は筆者)

この例において注目すべきは、“cordial tongue-lashing”であろう。この表現は、unusual collocation の好例であるが、その elements には以下のような対比が見られる。

“cordial” : [+friendly]

“(tongue-) lashing” : [-friendly]

このように、マーク・トウェインは、“tongue-lashing” [-friendly] を、逆の意義素 [+friendly] を持つ単語“cordial”で修飾し、女性の優しさと厳しさという一見矛盾する要素をブレンドして表現している。

次は本小説第24章からの例を見てみよう。

(エドワードは監獄に送られる途中であるが、行路の人は誰もエドワードに関心を示さない。)

They looked neither to the right nor the left; they paid no attention to our party, they did not even seem to see them. Edward the Sixth wondered if the spectacle of a king on his way to jail had ever encountered such **marvelous indifference** before.

(太字体は筆者)

この例において注目すべきは、“marvelous indifference”であろう。この表現では、以下のような対比が見られる。

“marvelous” [+interested]

“indifference” [-interested]

人々は、エドワード（浮浪児）の運命などには注意を喚起できず、自分のことにしか関心を持ってない。マーク・トウェインは、“marvelous”[+interested] を使って、“indifference”[-interested] を修飾し、このような人々の冷ややかな面を描写することで、その時代のイギリスの法社会風貌を批判している。

以下は、本小説の第10章からのものである。

（ジョン・カンティがエドワードを殴るのを群衆が見ている。）

We left John Canty dragging the rightful prince into Offal Court, with a **noisy and delighted** mob at his heels. There was but one person in it who offered a pleading word for the captive, and he was not heeded; he was hardly even heard, so great was the turmoil.

（太字体は筆者）

“noisy” : [+noise] [-joy] [-good] [-comfortable]

“delighted” : [-noise] [+joy] [+good] [+comfortable]

この場面では、マーク・トウェインが“and”を使って“noisy”と“delighted”を繋げている。“noisy”はこの文脈においては [+noise] [-joy] [-good] [-comfortable] という意義素、そして、“delighted”は [-noise] [+joy] [+good] [+comfortable] という意義素となるだろう。マーク・トウェインは、このような unusual collocation の修辭法を使って、冷やかな群衆を風刺する。

本 section での例で注目すべきところは oxymoron による次のような効果である。

①強調：第2番目の例でマーク・トウェインは、“grisly”[-negative] を使って、“humor”[+negative] を修飾、ヘンドンの現状の悲惨さを強調している。その上、悲惨な現状とエドワードとヘンドンの間の感情を対比して、二人の心理的つながりを読者に暗示している。②緩和：第3番目の例では、マーク・トウェインは、“brisk”[-negative] を使って、“assault”[+negative]を修飾し、ユーモアな言葉でエドワードの言葉の攻撃性と無礼さを和らげている。また、第4番目の例では、oxymoron の好例であるが、マーク・トウェインは、“tongue-lashing”[-friendly] を、逆の意義素 [+friendly] を持つ単語“cordial”で修飾している。矛盾を緩和する。③批判と風刺：第5番目の例では、“marvelous”[+interested] が“indifference”[-interested] を修飾し、人々の冷ややかな面、また、その時代のイギリスの法社会風貌を批判している。第6番目の例においては、マーク・トウェインは“and”

を使い“noisy”と“delighted”を繋げ、このような collocation が群衆を風刺することに貢献している。

## 2.5 others

最後に、2.5では、2.1から2.4で見たきた点だけでなく、コントラストが他の文体概念 (description/ participant items/同義語など)との関係をも融合している例を見てみよう。

本小説においては、しばしばキャラクターの外見や服装の細かい、リアリスティックな描写が、階級の差を強調することがある。その例を見てみよう。

(トムが初めてエドワードに会う場面である。)

Poor little Tom, in his rags, approached, and was moving slow and timidly past the sentinels, with a beating heart and a rising hope, when all at once he caught sight, through the golden bars, of a spectacle that almost made him shout for joy. Within was a **comely boy, tanned and brown with sturdy out-door sports and exercises**, whose clothing was **all of lovely silks and satins, shining with jewels**; at his hip **a little jeweled sword and dagger**; **dainty buskins** on his feet, **with red heels**, and on his head **a jaunty crimson cap with drooping plumes fastened with a great sparkling gem**. Several gorgeous gentlemen stood near—his servants, without a doubt.

(下線、太字体は筆者)

ここで見られるトムとエドワードの外見描写は、先に見た第1章のトムとエドワードの描写“Edward Tudor, Prince of Wales, who lay lapped in silks and satins, . . . Tom Canty, lapped in his poor *rags*, . . .”に呼応していることを、先ず、指摘しておこう。この例におけるキャラクターの外見や仕草の対比表現は、以下のようにまとめられる。



	トム	意義素	エドワード	意義素
服	rags	[-wealth]	all of lovely silks and satins, shining with jewels, a little jeweled sword and dagger, dainty buskins with red heels, a jaunty crimson cap with drooping plumes fastened with a great sparkling gem.	[+wealth]
動き	move slow and timidly	[-confident]	sturdy out-door sports and exercises	[+confident]
周りの人	/	[-class]	servants	[+class]
他の形容詞	poor little	[-positive]	comely tanned brown	[+positive]

トムとエドワードの共通点は、二人とも子どもであるということである。二人に大きな違いをもたらすものは、富と階級といった付加的な要因である。マーク・トウェインは、トムの服装を描写する際に“rags”1語しか使っていない。一方、エドワードの服装を描写する際は、44語を使って、帽子から靴、また、細かい飾り物までも詳しく描く。さらに、エドワードの服装以外の描写では、すべて [+good] の意味を持つ単語“silks”“jewels”“comely”が使われている。ところが、トムに関する言葉はすべて“rags”“poor”“little”のように [-good] の意味を持つ単語が使われている。

二人の外見描写におけるこのような差は、リアリスティックな描写であるとも考えられるが、同時に、ここに描かれている差は、階級差の強調表現ともなっている。

次に注目するコントラスト的な表現は、語り手が同じキャラクターに対して、いくつかの違った呼び名 (participant item) を選んでいる場合に見られるものである。以下を見てみよう。全て、第10章からのものである。(以下の例文における下線は全て筆者のものである。)

ここでは、トムの父親 (ジョン・カンティ) にトムに間違えられたエドワードは、彼に無理矢理家へ連れて帰らされる。そして、エドワードが、自分は王子だと言い張るので、トムの家族に精神に異常をきたしたと思われる。以下、引用とそこに見られるそれぞれのキャラクターに対して用いられている participant item である。

(トムの父親と祖母はエドワードに悪態をつき、また、父親は彼を殴る。一方、トム

の母親だけはこの勘違いに気付いている。)

エドワード :

WE LEFT John Canty dragging the rightful prince into Offal Court, with a noisy and delighted mob at his heels. There was but one person in it who offered a pleading word for the captive, and he was not heeded; . . . The insulted blood mounted to the little prince's cheek once more, . . . , and then gave the girls and their mother a beating for showing sympathy for the victim. . . . As she lay thinking and mourning, the suggestion began to creep into her mind that there was an undefinable something about this boy that was lacking in Tom Canty, mad or sane. . . . At last she perceived that there was not going to be any peace for her until she should devise a test that should prove, clearly and without question, whether this lad was her son or not, and so banish these wearing and worrying doubts. . . . The sleeper's eyes sprung wide open, and he cast a startled stare about him—but he made no special movement with his hands.

Participant items : “the rightful prince” “captive” “the little prince’s” “victim” “this boy” “this lad” “the sleeper’s”

トムの母親 :

Two frowsy girls and a middle-aged woman cowered against the wall, in one corner, with the aspect of animals habituated to harsh usage and expecting and dreading it now. . . . But the effect upon Tom Canty's mother and sisters was different. Their dread of bodily injury gave way at once to distress of a different sort. They ran forward with woe and dismay in their faces, exclaiming—

“O, poor Tom, poor lad!”

The mother fell on her knees before the prince, put her hands upon his shoulders, and gazed yearningly into his face through her rising tears. Then she said—. . . . The prince shook his head, and reluctantly said—

“God knoweth I am loth to grieve thy heart, but truly have I never looked upon thy face before.”

The woman sank back to a sitting posture on the floor, and covering her

eyes with her hands, gave way to heart-broken sobs and wailings. . . . The frightened girls retreated to their corner, but the grandmother stepped eagerly forward to assist her son. The prince sprang away from Mrs. Canty, exclaiming—

“Thou shalt not suffer for me, madam. Let these swine do their will upon me alone!” . . . The poor woman was smitten almost helpless with surprise and grief; but she contrived to hide her emotions, and to soothe the boy to sleep again; . . . then she dragged herself to bed, and fell sorrowfully asleep, saying, “But I cannot give him up—O, no, I cannot, I cannot—he must be my boy!”

The poor mother's interruptions having ceased, and the prince's pains having gradually lost their power to disturb him, utter weariness at last sealed his eyes in a profound and restful sleep.

Participant items : “a middle-aged woman” “Tom Canty's mother” “the mother” “Mrs. Canty” “the poor woman” “the poor mother's”

トムの父親 :

We left John Canty dragging the rightful prince into Offal Court, with a noisy and delighted mob at his heels. . . . “Do, father,” said Bet, “he is more worn than is his wont. Tomorrow will he be himself again, and will beg with diligence and come not empty home again.”

This remark sobered the father's joviality and brought his mind to business. He turned angrily upon the prince and said— . . .

The prince sprang away from Mrs. Canty, exclaiming—

“Thou shalt not suffer for me, madam. Let these swine do their will upon me alone!”

This speech infuriated the swine to such a degree that they set about their work without waste of time. Between them they belabored the boy right soundly, and then gave the girls and their mother a beating for showing sympathy for the victim.

“Now,” said Canty, “to bed, all of ye. The entertainment has tired me.”

The light was put out, and the family retired. As soon as the snorings of the head of the house and his mother showed that they were asleep, t . . .

Participant items : "John Canty" "the father" "the swine" "the head of the house"

トムの祖母 :

From another corner stole a withered hag with streaming gray hair and malignant eyes. John Canty said to this one—

. . . The frightened girls retreated to their corner, but the grandmother stepped eagerly forward to assist her son. The prince sprang away from Mrs. Canty, exclaiming— . . .

The light was put out, and the family retired. As soon as the snorings of the head of the house and his mother showed that they were asleep, the young girls crept to where the prince lay and covered him tenderly from the cold with straw and rags,

Participant items : "hag" "grandmother" "his mother"

これらの例に見られるそれぞれのキャラクターの participant items がプロットの流れの中で、どのように出現しているか、すなわち、どのような participant line を見ることができるのか確認してみよう。

Participant line :

エドワード : "(the rightful) prince" → "captive" " (the little) prince's" → "victim"  
→ "this boy" → "this lad" → "the sleeper's"

トムの母親 : "a (middle-aged) woman" → "Tom Canty's mother" → "the mother"  
→ "Mrs. Canty" → "the (poor) woman" → "the (poor) mother's"

トムの父親 : "John Canty" → "the father" → "the swine" → "the head of the house"

トムの祖母 : "hag" → "grandmother" → "his mother"

ここで注目すべきは、participant item に見られる二種類の性質、すなわち、キャラクターの恒久的な性質（身分、性別、職業など）と一時的な性質（それぞれの場面・文脈

<immediate context>においてのみ成立する語句によって表されている性質)である。以下のように表にまとめてみた。

Participant item	恒久的な性質	一時的な性質
エドワード	“the rightful prince” “the little prince’s”	“captive”/“victim”/“this boy”/ “this lad”/“the sleeper’s”
トムの母親	“a (middle-aged) woman”/“Tom Canty’s mother”/“the mother”/“Mrs. Canty”/“the (poor) woman”/“the (poor) mother’s”	
トムの父親	“John Canty”/“the father”/“the head of the house”	“swine”
トムの祖母	“grandmother”/“his mother”	“hag”

エドワードを指す participant items には、恒久的な性質を持つものと一時的な性質を持つものの二種類が使われている。前者は、彼の身分 (prince) [+high rank] を指すものであり、後者はトムと間違えられたために惨めな環境 [-high rank/+miserable] に折り込まれたエドワードを表すのに使われているものである。また、彼に関しては、他のキャラクターに使われている、家族関係に関する言葉は使われていない。このことから読者は、エドワードがCanty’s family ではないという情報を暗に繰り返し伝えられている。そして、一時的な性質を持つ“captive” “victim” “this boy” “this lad” “the sleeper’s” など [-offensive] の意義素を持つ participant item の使用は、この場面においてアイデンティティを失ったエドワードの逆境を強調しているように思われる。

母親を表す participant item には、恒久的な性質 (“Mrs. Canty” “woman (2)” “mother(3)”)を指すもののみが使われている。さらに、これらの items は形容詞“poor” (2)[+miserable] によって修飾されている。

父親と祖母は、恒久的な性質 (家族関係) を表す participant item、“the father” “grandmother” “his mother” などが使われて、形容詞“poor” (2)[+miserable] によって修飾されている母親とコントラスをなしている。また、父親には“swine”、祖母には“hag”、ともに一時的な性質 [+offensive] な意義素を持つ participant items が使われている。これらの使用はエドワードの [-offensive] の意義素を持つそれらとコントラストティブになっ

ている。

次はマーク・トウェインが同じ対象に対して、いくつかの同義語を選んでいる場合を見てみたい。その好例は、本小説の第6章の第1段落に見られる。

(この場面では、自分が王子だと主張するエドワードは自分が、群衆に笑われていじめられる。)

After hours of persistent pursuit and persecution, the little prince was at last **deserted** by the rabble and left to himself. As long as he had been able to rage against the mob, and threaten it royally, and royally utter commands that were good stuff to laugh at, he was very entertaining; but when **weariness finally forced him to be silent**, he was no longer of use to his tormentors, and they sought amusement elsewhere.

(下線、太字体は筆者)

ここで注目すべきは、マーク・トウェインの同義表現と対比表現であろう。

まず、同義表現を見てみると、エドワードを囲んで彼を嘲笑う人たちを表す際に、文脈的な同義語として、“rabble” “mob” “tormentors”という3つの単語が使われている。これら3単語に共通するのは、いわゆる群衆、意義素で表すならば [+many people] となる点、また、場面によっては、[+noisy] [+troublesome] となりうる要素も含んでいる点である。こういった同義語を使用することで、エドワードを取り巻く群衆の様子の描写に厚みをもたせているように思われる。

さらに細かく見てみるとこれらの同義語には、微妙な意味の違いが見られることにも触れておこう。“rabble” “mob” “tormentors”は、辞書によれば、それぞれ、[+noisy] [+troublesome / + violent] [+agonizing] の意味合いが強く、これらが、文脈に合わせてこの順番で使用されている点にも、マーク・トウェインの細やかな配慮が伺えるのではないだろうか。

さらに、ここでは、エドワードの視点から使われている単語と群衆側から使われている単語の間に、対比がみられることにも注目できるだろう。例えば、エドワード側からは、群衆に対して“rage” “threaten”のような怒りを含意する単語及び“royally (2)” “commands”のような“high class”を含意するような単語が用いられている反面、群衆側からエドワードに対して使われている単語には、“laugh” “entertaining” “amusement”など嘲弄を含意する語が使われている。

このような同義語の使用や語の contrastive な使用により、城外に放り出されたエドワード王子の孤立感や苦悩“deserted” “weariness finally forced him to be silent”が浮き彫りにされていると言えるのではなかろうか。

次は第12章において、マーク・トウェインが、表面的には London Bridge の居住民を描きながら深層では貴族階級を風刺している描写を見てみよう。ここにおいても、直接貴族階級を主語として描くよりも、間接的に描くことで、対比表現が彼らや彼らの階級に対しての風刺と批判を強めているように思われる。

①It had its aristocracy, of course—its fine old families of butchers, and bakers, and what-not, who had occupied the same old premises for five or six hundred years, and knew the great history of the Bridge from beginning to end, and all its strange legends; and who always talked bridgy talk, and thought bridgy thoughts, and lied in a long, level, direct, substantial bridgy way. It was just the sort of population to be narrow and ignorant and self-conceited.

②Such people would naturally imagine that the mighty and interminable procession which moved through its street night and day, with its confused roar of shouts and cries, its neighings and bellowings and bleatings and its muffled thunder-tramp, was the one great thing in this world, and themselves somehow the proprietors of it. And so they were, in effect—at least they could exhibit it from their windows, and did—for a consideration—whenever a returning king or hero gave it a fleeting splendor, for there was no place like it for affording a long, straight, uninterrupted view of marching columns. Men born and reared upon the Bridge found life unendurably dull and inane, elsewhere.

③In the times of which we are writing, the Bridge furnished “object-lessons” in English history, for its children—namely, the livid and decaying heads of renowned men impaled upon iron spikes atop of its gateways. But we digress.

(番号、下線は筆者)

第12章の描写通りに、London Bridge の居民の特徴をまとめてみよう。

番号	本文	特徴
①	"It had its aristocracy"	世襲
	a. old families	
	b. had occupied the same old premises for five or six hundred years	
	c. knew the great history	気の利いた話と嘘
	d. always talked bridgy talk, and thought bridgy thoughts	
e. lied in a long, level, direct, substantial bridgy way		
②	"It was just the sort of population to be narrow and ignorant and self-conceited."	儀礼的・慣習的態度 ひけらかす
	a. naturally imagine that the mighty and interminable procession which moved through its street night and day, with its confused roar of shouts and cries, its neighings and bellowings and bleatings and its muffled thunder-tramp, was the one great thing in this world, and themselves somehow the proprietors of it.	
	b. exhibit it from their windows	
	c. found life unendurably dull and inane, elsewhere.	
③	the Bridge furnished "object-lessons" in English history,	残酷
	a. the livid and decaying heads of renowned men impaled upon iron spikes atop of its gateways.	

ここに見られる London Bridge の居住者の特徴（世襲～残酷）は、*The Prince and the Pauper* の他の章で貴族が描写されている場面でも発見される。例えば、本小説第7章において、トムが初めて王子として食事をする場面で、貴族たちは「王子」の奇行を無視しながらも、彼らには王子にサービスする仕事を「世襲」と説明するような描写がある。

・・・but was interrupted by my lord the Earl of Berkeley, who fastened a napkin about his neck—for the great post of Diaperers to the Princes of Wales was hereditary in this nobleman's family.

また、本小説第9章、第11章などでは、貴族が登場するときのにぎやかで贅沢を極める場面が描写され、礼儀やマナーや規則などが相変わらず続けられている儀礼的・慣習的態度が描かれている。第8章でヘンリー8世が、Duke of Norfolk を殺したい"Before the



sun shall rise and set again, bring me his head that I may see it”と言う場面があるが、ここには貴族の「残酷」さが表されている。

マーク・トウェインは、ここで London Bridge の居住者の描写という方法を借りて、間接的に、また、小説全体にわたる文脈的な構図の中で、貴族階級がほぼ何百年も続いている儀礼的・慣習的態度、「残酷さ」などを風刺し批判しているのではなからうか。

以上、2.5では、participant item や同義語などの文体的視点から、コントラスト表現を見た。

本論文の第2章では、paragraph/sentences/word のレベルで5つの section に分け、コントラスト的な表現について探ってきた。それらにみられるコントラストには、作者のユーモア、アイロニー、風刺などの要素が含まれており、それらは、作品のプロット展開に効果を与えながら、貴族（階級）と平民（階級）、大人と子ども間のコントラストといった作品のテーマを強調することに貢献していることが見られた。

## 結論

本論文では、マーク・トウェインの *The prince and the Pauper* の文体的分析を試み、文体的な特徴と小説のテーマとの繋がりを考えてきた。作者が、作品の随所に見せる細やかな描写からは、事物や現象を細かくリアルに描くという意味において、リアリズムの一面が窺えるというのは間違いないことであるが、本論文の主張したい点は、このような描写において、特にコントラスト的な文体的特徴を持つ表現が大きく貢献しているということである。

本論文での文体分析では、主にコントラスト的な視点から、2.1 text 内のコントラスト、2.2 paragraph 内のコントラスト (2.2.1 word-level contrast 2.2.2 parallelism)、2.3 sentence内のコントラスト (2.3.1 複数の sentence 内のコントラスト:2.3.1.1 word level contrast parallelism 2.3.2 1つの sentence 内のコントラスト:2.3.2.1 word level contrast 2.3.2.2 parallelism) 2.4 unusual collocation (oxymoron) 2.5 others の5つの大 section に分けて分析を試みた。これらのレベルでのコントラスト的な文体的特徴と小説のテーマとの関係は、各セクションで詳述したごとくであるが、総じて言えるのは、それぞれがどれも作者のユーモア、アイロニー、風刺などの要素を含んでおり、それらは、作品のプロット展開に効果を与えながら、作品のテーマ（社会格差、人間性、儀礼・慣習などに見られる問題）を強調することに貢献していることであろう。瓜二つの二人の子どもが、衣服を取り替えたことからの苦難を通して成長するという大プロットを、こういった諸問題への作者の見解によって補完している本小説が、児童文学以上の意味を持ってい

ると、文体論的考察を重ねた上でも、再確認できたと思う次第である。ところで、このようなコントラスト的な表現から暗に伝えられている問題点は、この小説が執筆された時期、また、その頃以降のアメリカ社会の変化を考え合わせると、単に小説内のテーマを視野に入れた解釈以上に、16世紀と19世紀、イギリスとアメリカ、といったマクロ的な視野からの解釈へと続くように思われる。

最後に、文体分析における本論文での特徴について触れておく。小説におけるコントラスト的な表現を分析する場合、意義素を考え合わせ、これらの点から表現を眺めるのが客観的分析を心掛けた定石通りの分析となるのかもしれない。というのも、主観的分析からの脱却手段の一つとして文体論分析があるという見方もあるからである。この見方からすれば、文体論分析では可能な限り客観的かつ科学的な分析を試みる必要があるわけである。例外にもれず、本論文でもこういった方法を採用している。しかしながら、これらの分析では限界を感じることもあったので、本論文では、このような意義素分析を immediate context、plot におけるものにまで拡大し小説を眺めるという試みを入れている。*The Prince and the Pauper* というタイトルからも明らかにコントラスト的な implication が見られる本小説に限っていうならば、このような意義素分析の拡大利用は、無意味ではなかったのではないかと思われる。<sup>⑨</sup>

## 注

⑨1：マーク・トウェインは1835年11月30日にアメリカ合衆国のミズーリ州フロリダで生まれた。本名はサミュエル・ラングホーン・クレメンズ (Samuel Langhorne Clemens) であり、「マーク・トウェイン」は最もよく使われる彼のペンネームである。ペンネームというものは、自分が選ぶものであるので、ある程度作家の態度や性格などを伝えることができものである。そして、ペンネームの「マーク・トウェイン」は「水深2尋」などからくるものであるので、決してかっこうが良かったり、スタイリッシュであったりするようなペンネームではなからう。マーク・トウェインが4歳の頃、彼は家族と共に、ミズーリ州ハンニバル (Hannibal) の港町に引っ越した。これは彼の作品 *The Adventures of Tom Sawyer* と *The Adventures of Huckleberry Finn* で描かれる町セント・ピーターズバーグ (St. Petersburg) のモデルになっている。12歳の頃、彼の父親が亡くなり、一人で生計を立てなければならなくなった。そこで彼は、印刷の見習い、植字工、水先案内人、新聞記者などの仕事をしたこのように、彼は下層社会で生まれ、様々な生活を体験し、様々な人間と付き合ったのである。こういったことが、彼のその後の創作に堅固な基礎を築いた。例えば、*The Private History of a Campaign that Failed* (1885) は、マーク・ト

ウェインが南北戦争の時に戦争に参加した経歴を題材にしたものである。ヨーロッパと中東への旅の間、彼は 1869 年収集された有名な旅行手紙シリーズ *The Innocents Abroad, or The New Pilgrims' Progress is a travel book* (1867) を書いた。

㉔2：マーク・トウェインの作品中には、ペンネームと同じように、華やかさにこだわらない、文体が使われ時には、俗語が使われることでユーモラスな描写がみられるものもある。マーク・トウェインが“the father of American literature”と呼ばれるのも、そういうことに関係しているのだろう。19世紀前期のアメリカの作家の文体は、華やか過ぎて、感傷的で、けばけばし上品で形式ばったものが多かった。というのも、彼らはまだイギリス人のように優雅に書くことができるということを証明しようと努力していたからであろう。しかし、マーク・トウェインの文体は、口語が頻繁に使われた生き生きとしたものである。キャラクターの話し方は、実際の会話のように文字化されている。そして、各キャラクターの話し方には、独自の特徴が持たされているので、読者は誰が話しているかを即座に理解できるのである。日本語の敬語とかによると、読者は誰が話しているかを知っていることと違う。作家アーネスト・ミラー・ヘミングウェイ (Ernest Miller Hemingway, 1899年7月21日-1961年7月2日) は、“All modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*.”と言わせている。

㉔10

中国文学において同じ貢献をした魯迅㉔11 も、中国の文学史上重要な作家としてとらえられている。これら二人の作家、マーク・トウェインおよび魯迅の文学スタイルに似ているところがあるのも興味深い。魯迅は特別な歴史時期にあるため、彼の作品によくユーモア、風刺を使って、ペンを銃として、人民の闘争意識を呼び起こそうとする。では、何がマーク・トウェインのこのような文学スタイルを決めたのだろうか。これはきっとマーク・トウェインの個人的な経歴と当時の社会環境に関係があると思われる。

㉔3：金ぴか時代 (きんぴかじだい、英: Gilded Age, Gilded Era 1877–1900) は、アメリカ合衆国において資本主義が急速に発展をとげた時代である。しかし、拝金主義に染まった成金趣味の時代として扱われることが多く、政治腐敗や資本家の台頭、経済格差の拡大を皮肉った文学者、マーク・トウェインらによる同名の共著小説 *The Gilded Age: A Tale of Today* (1873年) に由来する。

㉔4：1898年、米国はスペインによるアメリカ大陸の植民地を占領し、カリブ海を支配するために戦争を開始した。戦争はスペインの400年にわたる植民地帝国に終止符を打ち、アメリカは戦争を通じて世界の覇権国になった。

㉔5：19世紀末、中国市場の獲得を目指してアメリカが打出した対中国政策。1898年ア

アメリカがフィリピンを領有し中国進出をはかろうとしたときには、すでに列強の独占的な権益が確定していたため、アメリカの入る余地はなかった。99年 J.ヘー国務長官はこれら列強の独占体制を打破し、中国進出をはかろうと、列国勢力範囲内における関税の平等などを求める覚え書をフランス、イタリア、ドイツ、イギリス、日本、ロシアに送り、各国とも原則的にはこれを了承。さらに1900年の義和団事変に際しては、中国全土における各国の通商の機会均等、中国の領土および行政の保全を強調する覚え書を再度各国に送付。このようなアメリカの政策は、のちに日本の中国大陸進出の意図と対立を生じ、太平洋戦争の一因となった。

⑥6: James R. Osgood and Company の創立者 James Ripley Osgood(1836-1892)は、マーク・トウェインの友人である。マーク・トウェインの *The Prince and the Pauper* と *Life on the Mississippi*(1883)は James R. Osgood and Company から出版された。James Ripley Osgood 創立した出版社は、今 Houghton Mifflin Harcourt(HMH)になる。

⑥7: Mark Twain Project(2022年8月閲覧)

<https://www.marktwainproject.org/xtf/view?docId=works/MTDP10004.xml;chunk.id=az0003;toc.depth=1;toc.id=az0003;citations=;style=work;brand=mtp#X>

⑥8: それは、中国で広く知られている現代小説『穆斯林的葬礼』(ムスリムの葬礼)(霍达 北京十月文艺出版社1988年初版)に見られるような規則性を持っているのではない。

⑥9: マーク・トウェインは、この作品で読者に残酷な現実を描いているとも言えるだろう。これは多くの他の作家(例えば、中国近代の魯迅と老舎のように社会的に暗黒の時代の作家たちに)にも見られることである。マーク・トウェインは、この作品で全力を残さず読者に残酷な現実を描いている。これは多くの作家が創作の動力と目的である。特に、暗黒の時代に、更にこのような作家がいる。例えば、中国近代の魯迅と老舎⑥12である。なお、マーク・トウェインは、中国に行ったことがないが中国の運命を感心していた。彼は、*Roughing It* (1872) で、その時代にアメリカで住んでいる中国人の境遇をまとめて、アメリカの人種主義を批判する。そして、マーク・トウェインは、同じ時代の中国人の反帝国主義闘争を非常に懸念しており、中国で勃発し義和団⑥13反帝国主義運動に非常に同情していた。1900年8月12日、彼は友人に送った手紙で次のような内容を書いた:「今中国全土が立ち上がれ。私の同情は完全に中国人に向けられている。ヨーロッパのギャングは長年中国人をいじめてきた。私は、中国人がすべての外国人を追い払い、二度と戻らないことを願っている。」同年11月、マーク・トウェインは、米国公教育協会の年次総会での演説で、「私は義和団です。義和団は愛国心が強く、彼らの勝利を願っています」と公に宣言した。

㊦10 : Ernest Hemingway, book Green Hills of Africa “All modern American literature comes from one book by Mark Twain called Huckleberry Finn. [...] it's the best book we've had. All American writing comes from that. There was nothing before. There has been nothing as good since.” Part I, Ch. 1 Green Hills of Africa (1935)

㊦11 : 魯迅 (ろじん簡体字 : 鲁迅 ; 1881年9月25日-1936年10月19日) は、中国の小説家、翻訳家、思想家である。本名は周樹人 (しゅうじゅじん)。中国で最も早く西洋の技法を用いて小説を書いた作家である。その作品は、中国だけでなく、東アジアでも広く愛読されている。日本でも中学校用のすべての国語教科書に彼の作品が収録されている。

㊦12 : 老舍 (ろうしゃ ; 1899年2月3日 - 1966年8月24日) は、中華人民共和国の小説家、劇作家。本名は舒慶春 (じょけいしゅん)、字は舍予。老舍とはペンネームで、苗字の「舒」の字の偏をとったものとされる。北京出身。満洲正紅旗出身。北京の町と人々をこよなく愛し、「北京之花」「人民藝術家」「語言大師」と称された。文化大革命で犠牲となった代表的な著名人でもある。代表作に小説『駱駝祥子』『四世同堂』『正紅旗下』(遺作)、戯曲『龍鬚溝』『茶館』。

㊦13 : 義和団 (ぎわだん中国語: 義和團運動) は、1900年に起こった、清朝末期の武装蜂起である。「扶清滅洋」を叫ぶ宗教的秘結社義和拳教による排外主義の運動が展開されたが、1900年(光緒26年)に清国の西太后がこの叛乱を支持して6月21日に欧米列国に宣戦布告したため国家間戦争となった。

## TEXT

本論文におけるMark Twainの作品からの引用は、Mark Twain Project: <https://www.marktwainproject.org> (2023年1月閲覧) からのものである。

## 参考文献

1. Mark Twain. *The Prince and the Pauper*, James Ripley Osgood (1881)
2. Geoffrey Leech, Mick Short. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, Routledge Taylor & Francis Group (2007)
3. GW.ターナー(著者)大澤銀作(訳者)『文体論』文化書房博文社(1985)
4. ジェフリー・N・リーチ マイケル・H・ショート(著者)石川慎一郎・瀬良晴子・広野由美子(訳者)『小説の文体 英米小説への言語学的アプローチ』研究社(2003)
5. A.G.Hopkins(著者)薛雍乐(訳者)『美利堅帝国 (*American Empire: A Global*

- History*』后浪 | 民主与建设出版社(2021)
6. 上田修「Pedagogical Stylistics: Syntactic Iconicity の紹介」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』第4号(2003)
  7. 上田修「The Language of Mark Twain's *The Adventures of Tom Sawyer*」『熊本大学英文学会英語英文学』第28号(1985)
  8. 上田修「The Language of Mark Twain's *The Man That Corrupted Hadleyburg*」『熊本大学英文学会英語英文学』第3号(1989)
  9. 上田修「これからの文体論—日本の大学における教育的文体論」『福岡女学院大学紀要』第16号(2006)
  10. 上田修「Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn*23章—Jim のエピソード—文体と語りの特徴: Foregrounding の視点より」『福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』比較文化第10号(2013)
  11. Mark Twain Project(2023年1月閲覧)  
[https://www.marktwainproject.org/landing\\_writings.shtml](https://www.marktwainproject.org/landing_writings.shtml)
  12. ミカエル・リファテール(著者) 福井芳男・宮原信・川本浩司・今井成美(訳者)  
『文体論序説』朝日出版社(1978)